1984.4

# 愛鳥教育

NO.12

愛鳥教育研究会

# ごあいさつ

本会発足以来専属に、会の企画運営、会誌の編集など、一切お世話くださいました松田道生氏は、昨秋ご病気にかかり入院いたしました。

研修会、探鳥会のリーダーとして、あるいは日光湖畔レークホテルで、また奥多摩の御岳山に、その他全国会員校に愛鳥教育の実地指導に八面六臂のご活躍とご指導を賜りました。あるいはそのためお体をそこなわれたのではとも思います。

本会では昨秋些少ですがお見舞を差上げ、ご全快をお祈りいたしました。

ご病気も快方に向い暮にはご退院なさいましたそうで安心いたしました。

専ら自宅でご静養のことと伺います。一日も早くご全快の上ご指導賜りますようお祈りいたします。

愛鳥教育研究会会長　田村活三

NO.12 愛鳥教育
1984.4

目　次

ごあいさつ　田村活三・2
第18回実績発表を審査して　柴田敏隆・4
愛鳥のつどいで発表して　上原澄子・7
愛鳥講座／愛鳥教育の実践
——中学校の事例——　下田澄子・9

# 第18回 実績発表を審査して

柴田　敏隆

私はこの実績発表の審査を担当するようになって、もう5～6年になる。それ以前は、神奈川県で、県内の実績発表と巣箱コンクールの審査を、第一次鳥獣保護事業計画実施以来担当してきた。さらにそれ以前、私の住む自治体で毎年秋行われる小中学生の夏休み自由研究発表会の理科部門の審査を十年以上担当してきたので、私の審査歴は以外に長いと思う。かなり馴れているはずなのに、毎年、この審査に当ると精神的には大変な重圧を感じて、恐らく、副腎からはアドレナリンがドバドバ分泌されるに違いない。

審査はそれ程に難かしいし、責仕も重いのである。

現在は、決められた審査項目が幾つかあって、そこに10点ないしは15点満点の枠があって、評点を記入することになっている。

各審査員の評点を合計した一覧表を作って綜合評価に望むわけであるが、ここ数年私の最高の得点と最底の得点とは、この合計の評価でほとんど合致している。むずかしいのは、その中間で、評価が各審査員によってひどくばらつくのがふつうである。

審査を何年か続けることは、その評価の客観性と妥当性をたかめるのに効果があることは確かであるが、反面ともするとマンネリズムに陥りがちで、新鮮な感動に乏しくなる恐れがある。本文は、そういった反省の下に私の主観と偏見と独断を、むしろ活かすべく努力して綴ったものである。

野鳥愛護の手段としては、給餌、給水、巣箱架設、食餌植物植栽などが基本となっている。これを踏まえ、存分にその技術を駆使して、まず当り前。実績発表大会に臨んで、全国的立場からものを言うならば、その上になおかつ、新規軸を盛り、独創的な発展や新しい分野の開拓に見るべきものがなければならない。

その点、その基本となる定石的レベルに到らない発表が、未だにあるのは、当事者の認識が低いのが、地方自治体での審査を通ってきたとすれば、その自治体のレベルが低いといわなければならない。

オリンピックのように参加することに意義あり、とする見解は、この種の教育活動を、ぬるま湯的安易さと自己瞞着的低次元に停滞させるばかりで、私は余り意味ないと思う。

ここには、権威に対する健康な挑戦の意欲があり、そのためへの高い水準での努力がみられなければならない。

戦後の学校教育には、とかく競争原理が等閑視され、悪平等が跋こして、進歩向上が妨げられているうらみがあるのではないか…。

野鳥保護イコール巣箱一遍倒という図式はもう過去のものとされているが、今回もその形の発表が2～3あった。しかし、それなりに定石をぬきんでているのならば、良い。今回の三戸高校のは、その一例で、さすがに高校生ならではのできばえの細かさで、巣箱利用の限定条件やその限界を実証したのは立派であった。とりわけ、巣箱の清掃修復の重要性を明らかにしたのは良い。コノハズクの巣箱利用も、日本では初めてのことであろう。

巣箱だけの研究でも、その他の定石がマスターされているかは、まず審査員にはわかるものである。

西ドイツなどで盛んな、巣ポケット、巣台、巣棚、営巣しやすい形の樹枝剪定などの研究が、一向に挙ってこないのは、もう20年になんなんとするこの発表会に対して、いささか勉強不足といえよう。

営巣期にいろんな巣材を提供する努力もヨーロッパなどでは常識で、中には色とりどりの毛糸屑を供与し、出来上った巣が、利用を終ったら回収して、コレクションとして楽しむものもいるほどである。ミノムシーミノガ幼虫ーを裸にして、毛糸屑やカラープラスチックスで巣を作らせる試み

は、日本でも行われている。しかし、あまり深入りするのは邪道であろう。

スライドで禽舎をうつして飼い鳥にふれた学校が2校あった。野生鳥獣の愛護とペットの飼育とは、少くも意識の上で画然と区別すべきである。

傷病鳥の介護ならば、家禽と一緒にすべきでないし、健康回復後の野生化訓練に触れなければなるまい。

人間の被護がないと死滅してしまう家禽は別として、野鳥を禽舎内に飼うことは、罪ない者をいわれなく終身ちょう役に処するような不当な行為であるし、多くの場合、法的手続による許可が必要である。

理科や道徳の課目で、家禽飼育の必要性はあろうが、野生動物に関しては安易なセンチメンタリズムに溺れてはならない。

今回の発表の中に、鳥に親しむ→学ぶ→守る→拡げる、といった明確な方向づけを持った学校が幾つかあって、その結果、親子探鳥会、カービング展、県民の森への働きかけなど大きなみのりをもたらした例が多かったのは見事であった。

作戦計画というよりか戦略といった形でのプランニングが、このような大きな発展と成果を納めたものであろう。しかし、このプロセスは、必ずしも一方向へのフローでなくても良い。つまり、学びながら親しんだり、拡げる過程で学んだりしても良いのである。

その辺も、戦略の中で、主と従の関係で扱ったら、複合的に効果は高まるであろう。

戦略が見事に功を奏したのが、船橋小学校と高部屋小学校であろう。

それは、先進校の実績を深く学んで土台とした上に、専門家を招いて、教師自身が、意識改革と基礎を身につけてから事に当ったことである。

高部屋小学校は、たった2年間のキャリヤーで

見事な実績を納めている。ここでは連盟の地方専門委員である田代さん、浜口さんの指導が、極めて高い効果を発揮した。

船橋小学校は、都内なので、連盟のおひざ元にあるという地の利はあった。しかも、一昨年発表して高い評価を得た同じ世田谷区の二子玉川小学校の動向を冷静に見ながら満を持していたという感じで、それだけに極めて充実した内容を具えていた。

このところ、急激に台頭してきた大都市内の大規模校の愛鳥活動の代表格とも言うべきものである。

今までは、地方の、自然に恵まれた、小規模校の、時には辟地校である小さな学校の真摯誠実な努力が、とても感動的であったが、都会の大規模校の意識の高さ、その理念の堂々としたさまに、圧倒されそうである。

ベテランの、スター的存在あるいは地方にあってサムライ的存在の指導者が、独力で愛鳥モデル校を背負って立っていたロマンの時代は、だんだん遠くなりつつあるようだ。

そのベテランが転任すると、前の学校は風船がしぼんだみたいになり、新任校は新星のごとく、輝き出す、といったパターンは、本当は余り良くないのであろう。

とりわけ、愛鳥モデル校指定は、文部省系列の学校にあっては、傍系のいわば、余計な仕事でもあるようだ。それだけに、全校挙げての取組みと協力体制が大切で、そういった努力の結果は、むしろ、逆に理科、社会、道徳などの教科に、鋭い問い正しを求めてさえいるのではなかろうか。

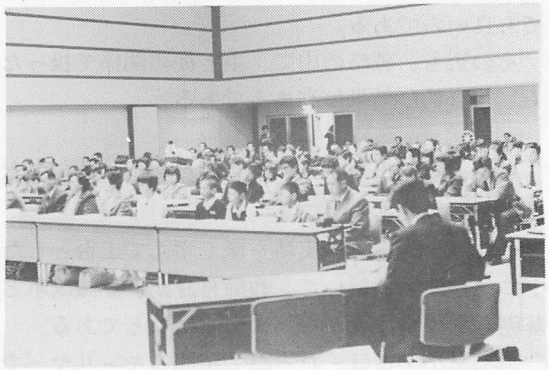
昭和56年に発表した、愛知県の豊岡中学校が、非常に優れた愛鳥活動の成果を挙げながら、その究極に、野鳥に餌を与えるのは野生からの堕落を招来しかねない、と喝破する次元にまで、生徒の意識改革をもたらしたのは、他の単独教科では成し得なかったことではないか。愛鳥教育活動を、合科的視点で把えると、これだけの成果を挙げ得るのである。環境庁系列だから傍系というならば、どちらが教育の神髄を衡いているかを虚心に考えてみたい

ここ数年来、中学生の成果が、いかにも中学生らしい立派な内容を具えてきたことも着目に価する。従来は、どうも小学校の亜流の域をぬきんでてなかったのである。

今回はなかったが、大人の（児童生徒ではない）発表が、一番下手で、とりわけ学校の先生のそれが最低であったのは、どう話したら人様にわかってもらえるのかへの気くばりが足りなかったからであろう。深く自戒すべきである。

発表の際の表やグラフを見やすくし工夫することも、特段の努力が欲しいと思う。持ち時間の使い方は小学生が特に上手であった。

毎回思うのであるが、鳥以外のけものやは虫類両生類、魚類や昆虫などへの努力があって良いし、それらを通して幅広く自然を見つめる研究があって欲しいものである。



# 愛鳥のつどいで発表して

世田谷区立船橋小学校６年
上原　澄子

私たちの学校は、昭和52年に東京都の愛鳥モデル校の指定を受け、それから６年間愛鳥活動を続けて来ました。

みんなで、巣箱やえさ台を作って、その巣箱やえさ台をとなりの神明神社や、校庭や、うら門などにたくさんかけています。えさ台の上には、１、２年生の子供たちが給食で残したパンやみかんをのせてくれます。スズメがよくそのパンを食べに来ます。

その他、家の近くなどで鳥が死んでいたら、うめてあげます。巣からおちたつばめのひなや、けがしている鳥を学校へもっていって石橋先生やみんなで看病してあげ、元気になった鳥は校長先生がみんなの前で大空にはなちます。

秋になるとカルガモのつがいがプールに来ます。先生が放送でみんなに知らせるとみんなプールのまわりからカルガモを見ます。

毎週金曜日の朝７時30分から学校の屋上で、石橋先生と野鳥クラブや野鳥委員会の人たちと一緒に双眼鏡をもって探鳥会をします。私も野鳥クラブの一員です。冬の寒い時にも屋上で元気にやっています。３年前から始めて今までに約27種類もの鳥が見られました。その中でも、ドバト、ヒヨドリ、スズメ、ムクドリ、キジバトなどがよく見れます。

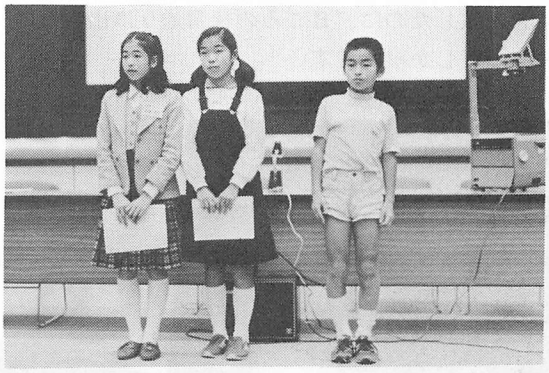
このような６年間の活動をまとめて「愛鳥のつどい」で発表することになりました。

放課後に残って何回も練習しました。発表の持ち時間が15分ときめられています。最初のうちは、早口でしゃべってしまうので、10分くらいで終わってしまいます。先生に、

「早い！早い！」

と、何回も注意されて、自分で読み方をいろいろと工夫した結果、最後には、規定の15分ぴったりに終わることが多くなりました。

区の「みどりの課」の人たちも見に来てくださり指導していただきました。次の日の練習の時、原稿を見たら、新しく書き直されていたので、み



んなゲソーッとしてしまいました。読みなれるまで大変でした。スライドの写真がなかなかできなくて、そこの写真をぬかして、練習しました。だからスライドの方が早く進んでしまったり、おくれたりすることが何度もありました。間をしっかりあけることも、とってもむずかしく感じました。

本番に発表する時は、とにかくきん張しないでおちついてしっかり発表するんだぞッと自分の心にいつも言い聞かせていました。

本番の日が来ました。

いろいろな学校の人たちが来ています。よくできるかなと、ドキドキして来ました。でも、会場で他の学校が発表しているのを見ていて、みんな、スライド、ＯＨＰ、けいじ板と少しごちゃごちゃしているけれど、私たちのは、スライド１つなのですっきりしていて、わかりやすいなどと思っていると、だんだんと心がおちついて来ました。聞いていて、言葉がはっきりしないで、聞きずらかったり声が小さい人がいたので、自分が発表する時には、そういうことを気を付けようと思い自分にも自信がついて来ました。

いよいよ私たちの番になりました。

発表していると少し早くなってくるので、早い、早いと自分に心の中で言い聞かせながらやりました。

ひとつだけいいことがありました。それは、会場が暗くて、私の顔も熱心に見てくれている人たちの顔もよく見えなかったので、あまりきん張し

なかったことです。

発表が終わると審査員の質問です。私は、

「答えられなかったらどうしよう……！」

と、思っていました。２番目の質問が聞こえなかったのでこまりました。でも、志村さんが教えてくれたのでホッとしました。

本番は14分30秒だったそうです。私は、あんなにきん張したのに、日ごろの練習通りに出きたので、うれしかったです。

「愛鳥のつどい」で発表できるだけでもすごいことだと思ったのにその上最高の環境庁長官賞までいただきとってもうれしかったです。

これも船橋小学校の先生やみんなが、６年間の愛鳥活動で鳥をかわいがったり、守ったり、勉強したりして来たからだと思います。これからも私たちの町にたくさんの鳥が来てくれるように愛鳥活動を続けて行きたいと思います。

# 愛鳥講座／愛鳥教育の実践（中学校の事例）

愛鳥教育研究会常任理事
下田　澄子

**はじめに**

「受鳥教育」10号、11号では、「愛鳥教育の計画」の表題で、小学校の愛鳥教育について、特に学校の計画を重点にしてご紹介させていただきました。そこで今回は中学校の事例をと考えましたが、すでに9号で、音羽中学校の「愛鳥活動の計画」をご紹介してありますので、今回は視点を変えて、中学生に対する指導の方法、生徒の主体的な活動状況を中心にして、その事例を追ってみることにいたしました。

**愛知県豊橋市立豊岡中学校の事例**

（鳥獣保護実績発表大会添付資料「葦毛の野鳥・その保護活動」冊子「葦毛の野鳥」その他の同校発行印刷物により記載します。）

1，学校をとりまく環境と自然保護活動の始まり。

この学校は、豊橋市の東部に位置し、西部の市街化地域から、東部の水田地帯、東端の弓張山山系まで、広く変化に富んだ校区を持ち、葦毛湿原もその中にあります。生徒数は1,488名(昭和55年)。10年前は700名あまりで、急速に市街化されている状況にあります。

豊岡中学校の自然保護活動は、具体的には、昭和48年度から始められています。しかし「ふるさとの自然を愛す。ふるさとの人々を愛す。そして、日本を愛する心を子どもたちに芽生えさせたい。」とする考え方を基調として、昭和37年、青少年赤十字に加盟し、以来、青少年赤十字の三大実践目標のひとつの「奉仕」に視点を合わせ、学校内外の実践活動が推進されてきました。

この「葦毛の湿原を守ろう」とする自然保護活動は、一女生徒の呼びかけを、生徒会が受けとめて、奉仕活動として実践に移したのがその始まりで、その発展の経過の中に愛鳥活動も生まれ、他の追随を許さないほどの立派な成果をおさめています。

2、自然保護活動の概況。

この活動を指導された、野鳥について造詣の深い皿井信先生の「行動を通して学ぶ、自然保護教育」の論文から記載します。(一部抜粋、要約等お許しください。)

一女生徒が校内話し方大会で「校区の葦毛湿原には、シラタマホシクサ、ウメバチソウ、サギソウなど咲き、優しく呼びかけています。身近なこの美しい自然にふれる時私の心はなごみます。このすばらしい自然を私たちの手で守っていきましょう。」と全校生徒に訴えた。

そしてこの話に、心を動かされた生徒会執行部は、葦毛湿原に足を運んだ。だが、休けい所のベンチはこわれかけ、ゴミカゴのゴミはあふれ出て野犬に散らかされて、湿原のすばらしさ以上のショックを受けた。

「自分の校区にある湿原がこんなに汚れていては恥かしい。このままでは葦毛の自然がダメになってしまう。みんなの手で守ろう。」と立ち上った。

生徒会の執行部の呼びかけで、まず大掃除が行われた。180名の自主参加によりゴミ、アキカンのかたづけ、4ヵ所の休けい所にゴミカゴ、アキカン入れをおき、さらに放課後のボランティア活動で作ったベンチ、テーブルも設置した。

そしてさらに、「ゴミカゴなど設置しただけではだめだ、ゴミを回収したり、ベンチやテーブル、歩道の補修をしていかなければ……。この活動を永く続けよう。」ということで、生徒会の下部組織として、自主参加による、葦毛湿原・岩崎自然歩道パトロール隊が結成された（昭和49年85名、50年140名、51年230名、52年は360名）。毎週土曜日（雨天でない限り）の午後、十数名のグループで葦毛湿原、岩崎自然歩道のパトロール、奉仕活動を行った。活動の内容は、(1)ゴミ、アキカンなどの回収。(2)ゴミひろいや掃除。(3)ベンチやテーブル、木の道の補修。(4)道路、休けい所の除草。(5)昆虫、植物の観察。(6)小鳥の巣箱かけと観察。冬季の給餌台への給餌活動。(7)看板等をたてて、530（ゴミゼロ）運動の普及に努める。など、この仲間は土曜日毎、湿原入

口に集まり活動を開始した。

そして初めのうちは、　ゴミ、アキカン集めに追われていたが、半年後「ゴミ集め」という消極的活動から、湿原を訪れる人たちに「ゴミ持ち帰り」を訴える積極的活動に脱皮し、各所に「自分のゴミは自分で持ち帰りましょう」というような看板を立て、最初に設置したゴミカゴの数も減らしていった。その効果はあがりゴミを置いて帰るハイカーは少なくなった。

温原をきれいにするだけでなく、植物、昆虫、野鳥などを積極的に保護する時間の余裕も生まれ、かん木の原生林に松林が続き、ヤマガラ、シジュウカラなどたくさんいるので、49年より毎年３月に奉仕活動で作った巣箱40個余りをかけた。また49年から毎年５月のバードウィークの午後には、巣箱の営巣調査と探鳥会を行った。また50年の冬からは、湿原の近くに「野鳥を呼びよせよう。」と４ヵ所に給餌台を設置し、11月から３月の冬の間給餌活動を続けた。

なおここ数年来、植物の盗掘者やハッチョウトンボの乱獲など多く、以前咲きほこったサギソウも数えるほどになった。そこで、50、51年の春には、校区の園芸家の寄贈のサギソウ千株を、パトロール隊の手で、湿原に植えた。

まだ大切な自然を守るためには、その良さを全員に知ってもらうことであると考え、一人でも多くに、葦毛の自然を紹介していこうと、校内新聞「葦毛の詩（うた）」を毎月発行した。内容は、月々の葦毛の、植物、昆虫、見かけた小鳥など、四季おりおりの生物について知らせ、特に自然保護の大切さを訴えたのである。

以上この湿原保護活動から、自然を愛する気持が、自主活動の体験の場から芽生え広がった。自然保護というものは、いくつかの輪が重なって進められていく、そこにいる生きもの、小鳥やけもの、見落されそうな小さな動物、それから植物、それに人間の思いやりと実践活動、これらがみんな手をつなぐことによって効果が現われると思う。

以上、皿井先生は淡々と、豊岡中学校の自然保護活動について書かれています。しかしこのように活動が行われ、発展していくことは、実際には大変むずかしいことであると思われます。その点についていくつかをあげてみますと、女生徒が現状を見て全生徒に訴えたこと、それを生徒会の執行部が受けとめ、すぐに葦毛の湿原にでかけたこと、汚された湿原をみて、恥かしいと感じ、さらにこれでは自然がダメになる、自分たちの手で守ろうと呼びかけたこと、すぐに180名もの自主的パトロール隊が編成されたこと、その上その隊員の数が年々増加しながら、しかも何年間も土曜日の午後に活動し続けられたこと、そしてまたその内容も、清掃活動から出発して、いつか動植物の観察や保護の活動に発展していったことなどです。

結局、その蔭には、冒頭の「ふるさとの自然を愛す」という学校の基本的な考え方が、生徒の心に定着し、また青少年赤十字の目標「奉仕」の心が、身についた姿勢として培われていた、学校の教育全体の流れのすばらしさがあればこそと考えられます。

またさらに、指導にあたられ、常に生徒と行動を共にされた先生のご努力と、野外の生物についての高いご見識、観察や保護について、具体的な方策をお持ちになっておられたことなどによると思います。

なお学校全体の組織運営が整備され、教職員相互の協力態勢があって、初めて運営できることであり、また父母や地域の人々の理解、協力も見逃せない要因と言えます。

３、愛鳥活動の内容

全国鳥獣実績発表大会での生徒の発表によりますと、先ず「野鳥の保護は、自然保護に通じる。」と言っています。そして自分たちの究極の目的は自然保護であり、それを達成するため、まず実践活動を主体としたと言い、さらに、その活動の中

で、保護活動の精神や信念に欠けていた、自然を守る心やマナーが不足していた、野鳥が私たちに何を求めているのか知らなかったなどのことに気づいたと反省しています。

そして野鳥保護活動の根底にある大切な事柄は、

(1) 野鳥を知り、友だちになろう。

(2) 野鳥を保護する心を一人ひとりが持って、

(ア) 野鳥が生活するためのよい環境を作る。

(イ) 野鳥の身になって考えられる心を育てるということにあるとしています。

具体的には、

(1) 巣箱の作制と架設

巣箱を作って葦毛の自然を守ろうと、48年より巣箱作りを始めたが、すべて作業は「奉仕活動」ということで、希望者をつのり冬休みにつくっている。そして、自分の作った巣箱を、自分で架設する楽しい一日が、3月の第1日曜に行われている。

現在、79個架け、あとの管理は、パトロール隊と湿原クラブの仕事となっている。

春の営巣調査は、ヒナを育てている時期なので、観察しやすい巣箱、1、2について、ブラインドの中から観察している。

12月～1月にかけて、巣箱の掃除、補修、営巣調査などする。営巣した巣箱の中には、残された鳥のフンなどから見て、ねぐらに利用されたもの、キツツキに穴を大きくあけられたもの、ムササビのねぐらになったもの、スズメバチやウマオイに占領されたものなどある。

なお古い巣箱にはあまり巣を作らない傾向があり、その年に架設した新しい巣箱の営巣率は、80%～90%となっている。従っていたんだものの補修、掃除、こわれた巣箱のとりかえに気をつかっている。

また3年前から、カラ類のなわ張り範囲を考えて、適正な巣箱かけに努力している。例えば、カラ類の巣箱を、平地の雑木林だけでなく、尾根伝いの林にふやすなどして、その営巣率を高めている。

けれども巣箱は、数をふやせばいいというものでなく、自然のバランスを乱すものであってはならないのである。巣箱を作ること、かけることは、愛鳥の心を育てることになるが、野鳥のためになっているかどうか考えなおす時期がきていると思う。

この(1)の内容は、特に、愛鳥活動を続けてきたこの学校の考え方や、この活動の指導にあたられている先生の自然保護に対するお考え、ご指導の非常に高度であることを感じさせられます。生徒が、春はヒナを育てているのでとことわって、その観察について配慮したということや、巣箱について、野鳥のためになる巣箱のかけ方という観点をもつようになったことなど、非常に今後の指導上の示唆を含んでいるといえましょう。そしてまた、教育という立場で、この巣箱作りや単箱かけを取り上げていく、考え方や方法については、やはり指導者が十分に、その学校をとりまく自然環境と学校の実態をふまえ、しかも野鳥の身になってということを忘れず確立していくものと考えられます。

(2) 給餌活動。

葦毛湿原一帯の餌木の調査をしたが、湿原内は、200本以上のイヌツゲをはじめ、たくさんの餌木にめぐまれている。そして湿原をとりまく、かや場や雑木林は、冬の野鳥のいこいの場でもあり、シロハラ、コジュケイ、アオジ、カシラダカ、ホウジロ、ツグミなどたくさんいる。なお各所に自然の水場があり、野鳥たちは水あびをしたり、のどをうるおしたりしている。

私たちは少しでも多く、湿原近くに野鳥を呼びよせようと、水飲場の整備や、冬の間の餌不足を補うために、11月～4月にかけて給餌活動を行っている。現在給餌台は、10個設

置され、リスのための地上の餌台、カラ類、キツツク類のための油肉専用の餌台もとりつけてある。

以上の給餌活動と調査は、パトロール隊と湿原クラブの仕事であり、餌は毎週土曜日の午後与えている。また残餌調査もこの時行うが、ほとんど餌は残っていない状況である。

なお53年から湿原入口の林に、実験観察給餌台をおき、一年を通して調査している。その記録の中には、ヤマガラ、シジュウカラ、カケス、ヒヨドリ、リスなどやってくるとあるが、ヒヨドリはジュースを好み、カケスはピーナッツやヒマワリ、カラの仲間はピーナッツや脂肉を好むなどのことがわかってきた。

また湿原クラブの有志により、葦毛、岩崎、多米、豊橋自然歩道の野鳥ラインセンサスも行われているが、標高による鳥相の変化、季節による鳥相の変化などがわかり、現在は種優占度、出現率の対比考察など始めている。

そしてこの活動から、人工の餌を与えることにより、野鳥が安心して住める自然環境を、育てたり守ったりすることが大切であるということを知ったのである。

特に自然、生物を対象とする時、自分の目や耳でたしかめ、また実験を通して、ひとつの考え方を持つのですが、この学校では、実践に非常に労力や時間をかけ、生徒自身が、その活動の結果、これこれのことがわかったと言っています。私はこの点に敬服し、同時に指導者の蔭のご苦労を思いました。またこの時、これは実験のためという観点を明確にして行っている点、全体的には、あくまで野鳥のためになる活動をしていこうとしておられることなどに注目しました。

(3) 人工ミニ湿原、その他の設置。

52年、校内に「ミニ湿原」を完成させ、餌木を植え、餌台三基を設置し、水場をかねた池を作った。そしてさらに54年度には、別に「鳥寄せ場」を作った。クロガネモチなど10本の餌木を植え、本格的な水場も作ったのである。

また理科室の廊下には「葦毛コーナー」「野鳥コーナー」を設けパネル写真などによって、葦毛の自然や野鳥の学習が、いつでもできるように展示し、1ヵ月に1回その内容を変えている。

また50年より、湿原入口に案内板を設置し、湿原を訪れる一般の人たちのために「葦毛の自然」を広報しているが、これも1ヵ月毎に内容を変えて掲示している。

(4) 探鳥会、野鳥学習会。

探鳥会は、休日に開いている。また夏休みには、夏休み野鳥教室を開き、講師を招いて、シギやチドリを中心とした学習を行い、時には、ビデオ、スライドなども使っている。この他、東三河野鳥同好会の主催する月例探鳥会にも、できるだけ参加するように働きかけている。

野鳥のさえずりの美しさにふれた喜び、双眼鏡の中に新しい野鳥の姿を発見したうれしさが、野鳥を愛する、保護する心につながっていくと考えている。

(5) ガイドブック「葦毛の自然」「葦毛の野鳥」

54年3月、葦毛の自然を知るために「葦毛の自然」が発刊され、昭和55年2月には、校区の野鳥のガイドブック「葦毛の野鳥」が刊行できた。また56年10月には「愛知の理科物語」に「生き物達の天国」として出版した。

ひとりでも多くの人に、自然のすばらしさ、野鳥のすばらしさを知ってほしいという願いをこめて、これらの本を著わし、湿原クラブは、それらをもとにして、より一層、植物や野鳥に対する保護活動、保全活動をすすめている。

野外活動に図鑑は欠くことができないものです。それを現地で十分に活用し、正しい観察結果を身

につけていきたいと考えます。しかし実際には、これがかなりむずかしいことで、このように学校自体の図鑑を作成することによって、いろいろ困難点が解消され、真に身についた観察、認識が生徒に定着できることと思われます。

私もいつも、自分の地域に適合した、自分の学校の児童に適切なガイドブックが欲しいと考え、それには自分たちで作成できれば一番よいと思っていました。何よりもその作成の過程で、いきおい調査も入念になり、データも正確さを追い、児童、教師にとって収獲が多く、その上できあがれば、それがどんなにか貴重なものに感じられ、その喜びも大きいかと思っていました。しかし残念ながら力不足、努力もたりず、予算もともなわないままに終ってしまいました。従ってこの学校の冊子に非常に感嘆し、同時にうらやましい気持が致しました。

冊子「葦毛の野鳥」のとびらには、

かけがえのない自然をみんなで育てましょう。

○鳥には鳥のくらし方があります。そっとのぞいて見るだけにしましょう。○野鳥の観察を通して自然のしくみを学ぼう。○野生生物（植物、昆虫、鳥、その他の生きもの）を採らないでください。○自分のゴミは自分で持ち帰りましょう。

と書かれています。また編集者の皿井先生は「この本について」として次のように述べられています。(要約)

葦毛の自然保護活動は、ゴミ集めから始まり、植物の保護、さらに鳥類の保護に発展させた。この本は、校区のそして葦毛の野鳥のガイドブックとして作った。この本を読んで、少しでも野鳥に興味が持てたら、まず身近な野外に出て、スズメでも ホオジロでも、自分の眼で見て欲しい。

鳥も自然の一員、人間も自然の一員と思う。鳥は人間より環境に敏感なので、野鳥が少なくなったりすることは、人間がやがて住めなくなると警告しているように思えてならない。野鳥を守ることは、人間の生命を守ることにつながるのである。そのために、一人でも多く、野鳥の好きな人を増やしていきたい。「鳥ってかわいいな」と思う気持が、自然保護の原点と思う。そんな願いをこめてこの本をまとめてみた。

すばらしい提言であると思います。愛鳥活動は、このように指導者の論理が確立して、初めて教育として価値あるものに実践されると考えられます。なおこの本は、

校区の野鳥を日本鳥類目録の順に、58年1年間（月1回の観測）に生息を確認した92種の中よく見かける鳥、知ってもらいたい鳥64種をのせてある。

A　大きさを中心としたワンポイントの説明。
　スズメ（15cm）ムクドリ（24cm）ハト（33cm）カラス（50cm）を基準とし、くらい、やや、すこし、ずっとの順でより大きくより小さくで示した。長さは全長をさす。（くちばしから尾の先まで）

B　見られる時期。
　年によって違うがおおよそのめやすとして書く。

C　生息場所
　この2～3年間確認した場所を中心に記述した。

D　色、形など（その特徴を書き出した）。

E　鳴き声（カタカナでさえずりと地鳴きにわけて）。

以上の他、野鳥に適合する自然の保全、そのための調査、視聴覚器材の利用などありますが、誌面の都合上いずれの機会にご紹介したいと思います。貴重な資料を提供していただきました豊岡中学校に厚く御礼申し上げます。要約、一部略などお許しください。

愛鳥教育　No. 12

昭和59年4月1日

発行人　田村活三

発行所　愛鳥教育研究会
住　所　〒150東京都渋谷区宇田川町37—10
渋谷レジデンシャルオフィス405
(財)日本鳥類保護連盟内
電　話　東京03(465)8601
郵便振替　東京2—92041
制　作　かなえ書房

# 愛鳥のつどい

## 第18回 全国鳥獣保護実績発表大会記録

1984.3

環境庁・(財)日本鳥類保護連盟

# 愛鳥のつどい

## 第18回全国鳥獣保護実績発表大会記録

目次


| | | |
|---|---|---|
| はじめに | | 3 |
| 発表主旨 | | |
| 野鳥はともだち | 船橋小学校 | 4 |
| 全校で取り組む愛鳥活動 〝鳥と友だちになろう〟 | 高部屋小学校 | 6 |
| 『愛鳥の町・東庄』をめざして | 東庄中学校 | 8 |
| 花と緑と野鳥の学園に | 日新小学校 | |
| 鳥声響く御座所の森 | 肱川中学校 | 12 |
| 愛鳥の心を広げる | 青陵中学校 | 14 |
| わたしたちの愛鳥活動 | 砂丘小学校 | 16 |
| 城山公園の巣箱利用と私たちの活動 | 三戸高等学校 | 18 |
| 生き生きした『自然学習』の中での愛鳥活動 | 大井沢小学校 | 20 |
| 富士北麓に広がる自然を守るために | 忍野小学校 | 22 |



第18回全国鳥獣保護実績発表大会記録愛鳥のつどい

昭和59年3月

発行　環境庁
受託　(財)日本鳥類保護連盟
〒150 東京都渋谷区宇田川町37－10
渋谷レジデンシャルオフィス405
ＴＥＬ　03(465)8601

本報告書は、(財)日本鳥類保護連盟が環境庁から委託を受けて実施した「第18回全国鳥獣保護実績発表大会」の報告書を、環境庁自然保護局長の承認を受けて発行したものです。

(承認　昭和59年3月26日　環自鳥第396号)

# はじめに

昭和59年３月１日

財団法人 日本鳥類保護連盟

環境庁と財団法人日本鳥類保護連盟の共催により行われている「全国鳥獣保護実績発表大会」は本年で第18回をむかえました。この催しは、小学校、中学校を中心に、高等学校、一般の方々が行っている野鳥や自然を守る活動のようすやその効果、そして、そのもととなる野鳥や自然の観察と調査といった具体的な実践活動の成果を持ち寄り発表するものです。

この大会への参加者は、全国の都道府県と、教育委員会の協議によって推せんされた多数の学校や団体の中から書類審査によって選ばれました。

第１次審査は、主催者である環境庁と（財）日本鳥類保護連盟、後援者である文部省、林野庁、そして日本鳥学会、（財）日本野鳥の会、（財）山階鳥類研究所、愛鳥教育研究会の関係者によって行われました。

発表大会は、11月21日に環境庁において行われ、選ばれた10校がそれぞれ発表しました。審査は、第１次審査と同様の審査員によって行われ、その日の内に発表、表彰が行われました。

ここに収録した発表内容の要旨は、あらかじめ提出された発表内容をもとに、環境庁から委託を受けて（財）日本鳥類保護連盟でまとめたものです。

この報告書は、野鳥の保護や自然を守る活動を、地域社会や学校教育の場で取り上げようとお考えの方々には、よい参考になることと思います。また、今後、当発表大会に参加しようと考えている方々にとっても参考にしていただくとともに、より優れた活動をするための基盤にしていただければ幸いです。

この大会の参加者の方々、後援者の方々、さらに大会当日、ご参集下さった方々に、改めて厚くお礼申し上げます。

# 環境庁長官賞
# 「野鳥はともだち」
東京都世田谷区立船橋小学校

私たちの学校は、東京都の南のはし、多摩川に沿った世田谷区にあり、区のほぼ中央、環状８号線という道路に面しています。環状８号線は、１日約６万台の交通量がありますが、防音壁があるので、その割に静かなところです。

船橋小学校は、校地内に約500本の樹木が茂り、隣に神社やお寺の森があり、都会としては緑に恵まれた環境にあります。昭和52年に、東京都の愛鳥モデル校の指定を受け、それから７年間、愛鳥活動を続けてきました。

**私たちの愛鳥活動**

私たちの学校では、愛鳥タイムの活動、クラブや委員会の活動のほか、理科や社会科、道徳などの学習の中で鳥に関係のあるものが出てきたとき愛鳥活動を行っています。家に帰ってから自主的に鳥について研究したりして学校へ報告する子もふえてきました。

○愛鳥タイム

毎月１回、木曜日の午後、１時間をとって全校児童が学年に応じ、計画にしたがって愛鳥活動を行います。

１年生は、巣箱に入ったムクドリを観察しました。また、スズメのぬり絵をしました。どんな顔かわからなくて困りました。

２年生は、餌台を作りました。カマボコの板やプラスチックのコップを使いました。

３年生は、学区域のツバメの巣を調べています。細かい観察記録を出し合って、ツバメが巣を作ってから巣立っていくまでのことをまとめています。

４年生は、巣箱の調査をしました。スズメ、ムクドリ、シジュウカラなど、鳥によって巣の作り方や材料がちがっていることを発見しました。

５年生は、巣箱作りをしました。できた巣箱40個は、学校や神社の木にかけました。

６年生は、学校や公園の清掃作業です。巣の材料に針金やビニールのひもなど危険なものがあったことから、巣を作る時期にこの活動をしました。また、愛鳥カレンダーを作り、近くの幼稚園や老人ホームに配りました。

５、６年の全クラスでは、愛鳥新聞「ムクドリ」を交代で発行。鳥の観察記録や研究文をまとめた文集「ムクドリ」も発行しています。

１年おきの展覧会には、必ず愛鳥コーナーが設けられ、愛鳥タイムの成果が発表されています。

○クラブ活動と委員会活動

野鳥クラブは、毎週金曜日に欠かさず早朝探鳥会をしています。３年前から始めて、もう100回を越えました。その結果、27種の鳥が見られました。出現率ではスズメ、ドバト、ヒヨドリ、ムクドリが多く、優占度ではスズメ、ムクドリ、ドバト、ヒヨドリが多くて、船橋で見られる鳥の75パーセントにもなりました。

これらの鳥は、グラフにしてみると数の変化がわかります。スズメは２月ごろ一番少なくなって、春から夏にかけてふえていき、秋からまたへっていきます。ムクドリも同じようになりました。わたり鳥のツバメが見られる時期もよくわかりました。

秋には、巣箱をおろし、巣の材料調べをしました。実にさまざまなものが使われていて、びっくりしました。ていねいに種類別に目方をはかり、記録しました。また、落ちていた鳥の羽根を集めて「鳥の羽根の標本」を作り、各学年の愛鳥タイムの時の学習に役立てています。

愛鳥委員会は、巣箱や餌台の見まわりのほか、年３回、５月と10月と２月に「愛鳥集会」を企画して行っています。「船橋の鳥たち」という愛鳥劇もやります。毎週水曜日の昼休みには、全校に愛鳥放送を行います。内容は、学年ごとの愛鳥カードの発表や、新しい発見のニュースなどです。

船橋小では、理科や社会科、国語などの学習にも、ふだんの愛鳥活動を生かしています。たとえば、６年生は道徳の時間に、人間や生物、そして自然や地球のことについて勉強しました。このような学校の活動で、鳥をはじめ、動植物を大事にする心が育ってきました。

学校には、傷ついたスズメ、巣から落ちていたツバメのヒナなどがたくさん持ちこまれます。それらの鳥を、家中で家族の一員のようにして育てた人もいます。大きく育ったヒナは、児童朝会の時、校長先生が大空に放ちました。みんなで拍手して、鳥の元気な旅立ちを見送りました。

手助けしてくれていたお母さんやお父さんたちは、バードカービングに興味を持ち、ＰＴＡで講習会を開きました。

鳥をかわいがる学校には、いろいろな鳥がたくさんやってきます。秋から冬、春にかけて、餌台に集まる鳥たちのなき声でいっぱいになります。プールに飛んできた１つがいのカルガモは、夕方の校庭を散歩するほどなれてきました。

私たち小学生だけでなく、船橋の地域に住む人たちがそろって鳥をかわいがり、大事にして、もっともっとたくさんの鳥たちがやってくる町にするため、これからもがんばっていきます。

## 58年度「愛鳥タイム」実践

年間指導計画に基づいて愛鳥タイムを実践してきた。活動を通して、児童の動植物に対する愛情が随所に見られた。特に、情緒面から児童のようすの一端をのせてみた。

| 学年 | 月 | 学習活動 | 愛鳥に対する児童のようす(情緒面) | 考察 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 9 | 愛鳥カードを読む | カードを読むにつれて関心を持つ | ・鳥を見ることに強い興味を示し，喜んで参加していた。 |
| | 10 | 鳥のぬり絵 | 楽しそうに，強い関心を示した。 | |
| | 11 | えさやりの計画 | 意欲はあるが当番活動むずかしい。 | |
| | 12 | 探鳥会 | 自分の知っている鳥の事を考える。 | |
| 2 | 9 | ヒマワリの種集め | どんな味の物が好きか話がでる。 | ・２年生の段階では身のまわりにいつ頃鳥が多いをわからせればよいと思う。 |
| | 10 | 鳥のぬり絵 | 本をよく見てぬったので覚えた。 | |
| | 11 | えさやりの計画 | ねこがこないか心配する。水が必要。 | |
| | 12 | えさ台作り | 鳥がおどろかないよう気をつけた。 | |
| 3 | 9・10 | 鳥のぬり絵 | 友だちの作品を見て「ちょっと色がちがう」とか，またやりたい。 | ・鳥があまりいない午後よりも１時間目に探鳥会を持つとよい。 |
| | 11・12 | 探鳥会 | 「探鳥会をもっとやりたい。」「カメラに写して大きくしてみたい。」 | |
| 4 | 9 | 鳥のぬり絵 | 「鳥の色には，いろいろあるのだなあ。」という声がきかれた。 | ・えさ台をよろこんで作っていたが，２時間では，たりなかった。 |
| | 10・11・12 | えさ台作り | 「くぎが出ていると鳥がけがをするから気をつけたい。」という声。 | |
| 5 | 9 | 身近に見られる鳥 | スライドに写し出される鳥に興味。 | ・巣箱作りは喜んでとりくんだが２時間で完成させるのはむずかしかった。 |
| | 10 | 鳥のぬり絵 | 細かく観察し色の違いを発見する。 | |
| | 11・12 | 巣箱作り | 喜んでとりくみ営巣への期待が大きかった。 | |
| 6 | 9 | 自由研究の発表 | 夏休み中の観察や体験が得られた。 | ・清掃活動が多すぎたように思う。 |
| | 10 | 清掃活動(芦花公園) | 鳥はじゅうぶん観察できなかった。 | |
| | 11 | 学校園野鳥園整備 | 沢山の鳥のくることを期待。 | |
| | 12 | カレンダー作り | 鳥への関心が深くなった。 | |

# 文部大臣奨励賞
# 「全校で取り組む愛鳥活動 〝鳥と友だちになろう〟」

神奈川県伊勢原市立高部屋小学校

**学校のようすと愛鳥活動の位置づけ**

本校は、神奈川県の中央部、丹沢大山国定公園の東山麓に位置し、田園に囲まれ山地も近く、自然環境には恵まれています。そして、昭和56年に神奈川県愛鳥モデル校の指定を受け、市教育委員会の研究委託も受けたのを契機に、「鳥と友だちになろう」を合言葉に、全校児童千百余名、すべての子どもたちが鳥と友だちになり、豊かな人間性を育(はぐく)むことができるように、活動を重ねてまいりました。

本校の愛鳥活動は、日常的な生活の中で行うことを基本とし、ゆとりの時間、特別活動、教科道徳との関連の中で進めています。毎月第４週は高小愛鳥週間とし、この週の月曜日の６校時、ゆとりの時間に愛鳥活動、水曜日は愛鳥放送、金曜日は愛鳥集会を行っています。

**全校を中心とした年間活動計画**

４月　年間計画作成　学級の鳥の決定
５月　標語ポスター作り　校内愛鳥展
６月　探鳥会　愛鳥映画会　ＴＶ４年
７月　自由研究　ＴＶ５年
８月　巣箱作り（高）
９月　巣箱展　自由研究発表会　ＴＶ６年
10月　探鳥会　巣箱かけ（高）　給餌台作り　ＴＶ１年
11月　愛鳥映画会　野鳥の森作り　ＴＶ２年
12月　給餌活動　ＴＶ３年
１月　給餌活動　探鳥会　ＴＶ漫画クラブ
２月　給餌活動　ＴＶ愛鳥委員会
３月　給餌活動　実のなる木の植樹

**児童活動の実際**

(1)知る活動

○「今日見た鳥」の調査　　第４水曜日の登校時、児童たちは野鳥を観察しながら集団登校してきます。この活動を通じて、何気なく登校していた道に、関心を持って臨むようにもなりました。

○巣の構造しらべ　　野鳥クラブの児童が中心となって、巣立っていったオナガの巣の構造を調査しました。巣は、檜の小枝124本、ナイロンの紐3.5ｇ、たこ糸１本、こけ45ｇ、シュロ6523本、地グモの巣72本、テグス糸８本、タバコのフィルター２本等でできていました。全校放送で構造を知った生徒たちは、「地グモでヒナを育てたのだろう」と感心し、「テグスは何のために」と不思議に思いながらも、野鳥の頭のよさや根気強さに驚き、巣を大切にしようという気持ちを強く持ちました。

この他、知る活動として、全校で愛鳥映画を年間に２回視聴しています。校内の２ヵ所には、愛鳥コーナーや掲示板を設けて、野鳥の学習に役立つ資料を展示しています。

(2)親しむ活動

○探鳥会　　自分の目や耳、体を使って、自然とのかかわりの中で野鳥を観察させることが大切だと考え、学校を中心に学年ごとの観察路を決め、各学年とも年に４回ほど、継続観察を試みています。

探鳥会後は、観察ノートや作文を書いて学習のまとめをしています。５年生の探鳥会では、23種の野鳥が生息していることや、季節的・地域的変化もわかりました。

○愛鳥放送　　第４週の水曜日のゆとりの時間20分間は、各学年やクラブ、委員会が、校内テレビで愛鳥活動のようすを発表しています。

１年生は鳥あてクイズや小鳥の歌を身体表現。２、４、５年生は、探鳥会の報告や愛鳥作文の朗読。６年生は巣箱の作り方や野鳥新聞の紹介や自由研究の発表。そして、３年生はいろいろなくちばしを作って寸劇「くちばし物語」の発表をしました。また、マンガクラブは創作愛鳥紙芝居を、野鳥クラブは、木の実の入ったヒヨドリの糞とその近くに出ていた１年目、５年目の木を提示して食物連鎖を発表しました。

○愛鳥集会　学校全体で野鳥に親しむ場として、第４週の金曜日の朝の20分間を当てています。この会の運営は集会委員が受け持ち、委員会やクラブが月ごとに割当てられています。

愛鳥委員会は紙粘土で作った実物大の卵を見せて鳥の習性についての発表、集会委員会は鳥の鳴き声あてやゲーム、理科委員会は気候と渡り鳥について発表、園芸委員会は野鳥の好きな木の実を15種集めるなど。また、野鳥クラブは、冬休みの探鳥会への呼びかけをしました。

この他に親しむ活動として、どのクラスも「学級の鳥」を決めています。1、2年生は、ぬり絵をしたりスライドを見たりして、さらに野鳥を身近なものにしています。6年生は毎月愛鳥新聞を発行して、校内に掲示しています。

(3)守る活動

○給餌活動　　校内には、ＰＴＡの労力奉仕による給餌台が8ヵ所あり、12月～3月の4ヵ月間、各学年と野鳥クラブ、愛鳥委員会で給餌活動をしています。高学年は観察記録を行っています。去年は、餌を与えて3週間目にヒヨドリが飛んできました。ヒヨドリが飛んで来る道はいつも決まっていることに気づきました。

○巣箱作りと巣箱かけ　　ここ4年間、巣箱づくりは5年生の夏休みの課題のひとつとして行われています。2学期に入ると父母と共同で製作した工夫のある巣箱で巣箱展を開きます。10月の終わりには、5年生の児童と全職員で、巣箱の清掃・修理、取りつけを行っています。巣箱は去年26%、今年は42%利用されています

○野鳥の森運動　　愛鳥委員会の活動として、校庭の樹木の調査をしました。大小905本の木々のうち、野鳥の好きな実のなる木は11%しかありませんでした。そこで、児童会に、野鳥が安心してすめる環境づくりとして、野鳥の森運動を提案。各クラスから野鳥を思う貴重な意見が寄せられ、実のなる木集めが全校で行われました。登校時に持ってくる木ですから小さなものばかりですが、皆が優しい心で持ってきた木を大切に育てながら、野鳥たちの環境を見守っていこうと思います。

守る活動としては、この他、愛鳥週間中に全校一斉で標語づくりやポスター描きをしています。さらに愛鳥の輪を地域へ広めたいと考え、伊勢原市の市民ギャラリーに愛鳥資料を展示させていただきました。市では広報で市民の方に視聴していただけたのが嬉しかったです。

また、元気になった傷病鳥のキジバトを大空へ放した時は、全校児童、喜びに大きな拍手をしました。2、4年生は、ヒマワリやトウモロコシの栽培に力を入れています。

**地域の人々との活動の実際**

○早起き探鳥会　　大人の人たちにも野鳥をよく知ってもらいたいという考えではじめました。ＰＴＡの方々と相談し、地区を単位に11回実施しました。

○愛鳥看板立て　　看板は、探鳥時の目安、高小の愛鳥活動のピーアール、野鳥の保護を目的として愛鳥委員会が製作しました。探鳥コースへの設置には、農家の方やＰＳＡの方が協力をしてくださいました。

この他にも、地域の方々からは野鳥の情報の提供、樹木の整理や給餌台づくりへの参加、餌や樹木や土の寄付、校内野鳥展への参加など、惜しみない協力をいただいています。

**おわりに**

愛鳥活動を始めたころは、児童たちは4～5種類の野鳥の名前がただ言えるといっただけでした。しかし、全校で取り組んで2年半経った現在では、野鳥に自然に目が向くようになり、野鳥に関する知識や会話も多くなりました。野鳥の生活を観察する時に好奇心のあまり駆け寄っていった児童たちも、最近では、野鳥の立場になってそっと観察できるようになってきました。ひとりひとりの児童の心の中に、野鳥に対する親しみや、野鳥を愛する心情が少しずつ芽生えてきています。

これからも、地域の人々と一緒に、野鳥の小さな命を大切にするとともに、自然を愛護する活動を継続していきたいと考えます。知識だけでない体の感動を通して、野鳥とのつきあい方を育てていきたいとも考えます。

# 文部大臣奨励賞
# 「『愛鳥の町・東庄』をめざして」

千葉県東庄町立東庄中学校

千葉県北東部の香取郡東庄(とうのしょう)町は、自然に恵まれた町です。北側には利根川が流れ、水田地帯が広がり、南側は50mほどの台地で畑が多く、斜面には林が多く残っています。現在までに記録された鳥類は約140種、県内でも有数の野鳥生息地となっています。

東庄中学校は、昭和47年4月1日に統合中学村として設立され、現在生徒数は805名です。学校は、町の中央部にあたる台地上に建てられ、周りには緑が多く、時には校庭でノウサギやキジの姿を見ることもできます。

**愛鳥活動の歩み**

愛鳥活動は、昭和55年4月、生物部の発足とともに始まりました。生物部は、東庄県民の森や利根川を主な調査地として選び、鳥類の継続的観察を行って、成果を発表していました。それらの活動が認められ、56年11月に県の愛鳥モデル校に指定されました。このことをきっかけに、愛鳥活動を全校でとり上げることを決め、愛鳥の心を育てるための展示・広報活動や保護活動にも積極的に取り組むようになりました。翌年4月には生徒会に愛鳥委員会も誕生し、生物部とともに愛鳥活動を推進する力となり、活動が発展してきました。

**愛鳥活動のねらい**

愛鳥活動の目標は、「自然に親しみ、自然に学び、自然をいつくしむ、豊かな心をもった生徒を育てる」ことです。文明の発達とともに、都市でも田舎でも、自然破壊が急速に進行しており、東庄町でも土砂の採取のために山が削られたり、池や川が汚染されたりしています。ところが地元の人々には、自分たちの周りに自然があるのは当たり前のことであるためか、自然への関心も低く、自然破壊にも無関心でいる傾向があります。これからは、自然を知り、自然と調和して、ほかの生物と共存できる人間を育てることが重要です。当校の愛鳥活動は、野鳥を入口として、郷土の自然に目を向け、大切にしていく生徒を育てることをねらっています。また、町全体に愛鳥活動をひろめていくための活動にも力を入れています。

**愛鳥活動の組織**

(1)生物部（部活動）　校外での調査や研究

(2)愛鳥委員会（生徒会）　校内での広報や展示など。

(3)野鳥観察クラブ（クラブ活動）　学校の周辺の鳥類の観察や調査。

(4)そのほか　各教科や道徳、生徒会活動、ゆとりの時間などでも愛鳥に関する研究を積極的にとり上げています。

**愛鳥活動の内容**

●愛鳥コーナーの設置　愛鳥コーナーを作り、「愛鳥だより」や愛鳥を呼びかける掲示物や展示物を常時展示しています。生徒の愛鳥意識を高める原動力となりました。

●愛鳥週間をもり上げる活動　毎年愛鳥週間には、工夫をこらした展示を行ったり、野鳥の声を放送し、愛鳥週間への意識を高めました。

●生徒集会での発表　生徒集会で、餌台についての発表や調査・研究の成果を発表しました。

●文化祭の展示　文化祭では、野鳥のジオラマ、調査・研究の成果、巣箱、野鳥の絵、写真などの展示を行いました。

●愛鳥だよりの発行　ニュースやトピックスなどを載せた「愛鳥だより」を隔月に発行し、愛鳥コーナーに掲示しています。

●自然観察会の開催　生物部主催で毎冬県民の森で開く自然観察会には多くの生徒が参加します。

●巣箱作り講習会の開催　校内で巣箱作りの講習会を開き、約50名の生徒が熱心に巣箱を作りました。でき上がった巣箱は、自分の家へもち帰ったり、県民の森へとりつけました。

●その他の活動　美術の授業で愛鳥ポスターを制作したり、全校の集会で野鳥について先生の話を聞く活動も行っています。

(2)野鳥を保護する活動

●餌台の制作と野鳥への給餌　野鳥を呼ぶための餌台を作り校内に置き、11月から3月まで愛鳥委

員が交代で餌を与えています。これまでにスズメ、ヒヨドリ、ツグミ、キジバト、シロハラなどがやってきました。

●巣箱の制作と設置　巣箱を作り県民の森へとりつけたところ、町内では少ないシジュウカラに利用され、思いがけない喜びとなりました。

●野鳥の好む実のなる木の植樹　これまでに、校庭やグランドの周りへピラカンサス75本、ウメモドキ55本、ネズミモチ10本、イヌツゲ10本、カキ10本、計160 本を植えました。早いものは実をつけ野鳥の餌となっています。

●餌となる作物の栽培　学校の畑でヒマワリ、トウモロコシなどを栽培し、餌の一部としています。

●傷ついた鳥の保護　巣から落ちたり、傷ついたりしたスズメ、ムクドリ、ツバメなどの世話をしています。手当てのかいなく、死んでしまう鳥もいますが、野鳥の巣やヒナを見つけてもそっと見守るなど、野鳥と接するマナーを学ぶ場になってほしいと思います。

(3)野鳥の調査・研究活動

●県民の森の鳥類の定例調査　生物部では55年4月から、毎月第1日曜日に、県民の森内の約3㎞のコースで、出現した鳥類のカウントを行ってきました。この継続調査によって多くのデータが得られ、県民の森の鳥のようすがわかりました。調査結果をまとめた論文は、県の科学論文展で銀賞を、学生科学賞で優秀賞を受けました。

●利根川での標識調査に協力　環境庁の実施している鳥類標識調査に協力し、利根川のアシ原にすむ鳥を調査しています。珍しい鳥や足輪のついた貴重な鳥などを手もとで観察して、細かい特徴や雄と雌の違いを知ったり、渡りのコースについての手がかりを得ることができました。

●ツバメの巣の分布調査　全校生徒で町内のツバメの巣の分布調査をしました。その結果、思ったより巣の数が少ないこと、巣のよく作られる場所は、広い水田をひかえた集落であることがわかりました。また、57年から学校のツバメの巣で、給餌回数を調べ、食べる虫の量の計算をしました。

●コジュリンの調査　コジュリンは全国的に数の少ない鳥ですが、東庄町の利根川べりにはたくさんすんでいます。そのコジュリンを保護するための資料となる生息状況の調査を行いました。またいろいろな調会を利用してコジュリンについて知らせるよう努力したため、今では多くの生徒がコジュリンという名前を覚えるようになりました。

●そのほかの調査　東庄町各地の野鳥の分布を調べたり、ツバメ、スズメ、コサギの分布のメッシュ調査なども行い、多くのデータが得られました。

(4)愛鳥の心をひろめる活動

●愛鳥カレンダーの制作　愛鳥モデル校指定にちなんで、57年度に、東庄町の野鳥の写真を入れた「東庄中愛鳥カレンダー」を作り、小・中学生や役場、駅、公民館などの公共施設、養護施設、老人ホームなどへ配布しました。このカレンダーは、当校が愛鳥モデル校であることを知らせ、野鳥への関心を高めることに大きく貢献しました。

●学校新聞や町の広報へ野鳥の記事を連載　父兄向け学校新聞「おおむらさき」や東庄町の広報へシリーズで野鳥の記事を連載し、父兄や町の人々の野鳥への関心や意識を高めるのに役立っています。

●校外での展示や発表　東庄中の愛鳥活動が新聞、雑誌、テレビなどでとり上げられ、紹介されると、資料を展示に使いたいという依頼が寄せられるようになりました。

**今後の活動方針**

(1)愛鳥活動を活発にし、職員や生徒の意識や関心をより高めていくとともに、活動が永続的なものとなるようにするための基礎固めに力を入れたい。

(2)調査・研究活動の成果を積極的に発表し、身近な自然についての認識を深めさせるとともに、自然保護の考え方にまで発展させていきたい。

(3)愛鳥活動の校外へのひろがりも見られるようになってきたので、これをさらに推し進めるため、父兄や地域社会への働きかけを強め、「愛鳥の町、東庄」の実現をめざしてがんばりたい。

# 林野庁長官賞
# 「花と緑と野鳥の学園に」

栃木県矢板市立日新小学校

**学校のあらまし**

私たちの学校は、東北本線の矢板駅と野崎駅の間にあり、周りには山や杉林等が多く、近くを江川、箒川が流れています。箒川沿岸にはチョウゲンボウが巣を作り、野鳥の会の人々が、巣立つまでの間、昼夜にわたり保護活動をしています。創立18年、児童55名、花と緑の美しい新しい学校です。

学校には、開校当時植えられた大きな桜の木をはじめ、アカマツ、アオギリ、プラタナス等が大きく育っています。学校の東側には、約25ヘクタールの住宅予定地が自然林となって野鳥のよいすみ家となっています。また、校庭には、春はパンジーやツツジ・サツキ、夏から秋にかけてはアジサイやサルビア、カンナ、マリーゴールド等の花がたくさん咲きます。

登校の際、春はウグイス、夏はカッコウの声に迎えられると、「今日もがんばるぞ」という気持ちが胸の中にわいてきます。

**愛鳥運動の歴史**

先輩から、8年前に巣箱作りを始め、校庭の桜の木や学校の近くの山へ架けたことを聞きました。学校の教育目標の「強いからだに　やさしい心」について、もっと私たちにできることはないかと代表委員会で話し合った結果、「愛鳥教育をやろう」ということになったのが始まりだということです。

その後、巣箱を架けたり巣箱の清掃をしたり、営巣のようすを調べたり、野鳥の食べる実のなる木を植えたり、あるいは愛鳥に関するポスターや標語の展覧会、巣箱コンクールへの参加、県民の森へ巣箱を取り付けるなど、野鳥をかわいがる運動を続けています。

**私たちの学校の愛鳥活動**

児童会で活動内容について話し合い、飼育栽培委員会が中心となって愛鳥活動をしています。今年の児童会の目標は、学校の目標をもとに、次のように決めました。

(1)みんなと仲よく　助け合ってがんばろう。
(2)小鳥や生き物を　かわいがろう。
(3)進んで仕事や良いことをやろう。

この3つの目標に向かって、餌台に餌をやったり、巣箱を取り付けたり、調査・広報等、いろいろな計画を立て、全校生徒が協力し合って活動しています。

**私たちの学校の愛鳥活動の実際**

(1)学校や家の周りの生き物をかわいがる。

ア．校庭に3ヵ所餌台を付ける。

イ．係を決め、毎日餌をやる。は、パンくず、スイカやカボチャの種子など。

ウ．餌台を作ったり、餌をあげる家庭が多くなった。

エ．水場は、観察地や近くに小川があるので、特別には作りませんでした。

オ．かわいがっていた金魚やメダカ、小鳥が死んだときのお墓を校庭の裏に作った。

カ．毎年巣箱を取りつけたり、巣箱の清掃をする。巣箱は、ゆとりの時間を利用したり、日曜日に親子で作り、学校の周りや県民の森などへ取り付けた。取り付けは、秋、巣箱の掃除のときにした。

(2)小鳥や植物・動物について調べ、みんなに知らせる

ア．どうして野鳥を大切にするか

私たちは、なぜ野鳥を大切にしなければならないのか？　それは、野鳥が毛虫等を食べるからだと先生や先輩から聞いていました。そのためかどうかわかりませんが、私たちの学校には、アメリカシロヒトリが発生しません。ガは時々見るのですが、発生しないのは野鳥がたくさんいるからだと思います。

そこで野鳥がどのくらい虫を食べるのか、学校のポプラの木に取り付けた巣箱にシジュウカラが巣を作ったのを機会に調べ、30分単位で記録をとってみました。運ぶ虫の数は1匹のときも2匹のときもありました。1日に

ヒナに虫を与える回数を朝5時から夕方5時まで12時間とすると、30分間に平均9.6回、計230回となります。毛虫の数を1回に1匹とすると230匹、1回に2匹とすると460匹となります。このように、野鳥は、木の芽を食い荒らす毛虫等をたくさん取ってくれていることがわかりました。

イ．野鳥の巣の研究

児童の家のひさしに巣を作ったスズメのひなが巣立ったので、その巣を調べてみました。ひとつの巣に、木の小枝や枯れた草、コケ類等が874本もありました。これらを、あのスズメの小さなくちばしで1本1本運び、私たちがびっくりするほどの美しい巣を作るのです。このスズメの苦労を考えると、巣をこわしたり、いたずらしたりすることは、絶対にやってはいけないと思いました。

ウ．お友だちの家にもたくさんの野鳥が巣を作っています

私たちは、学校に来ている人の家にどのくらい野鳥が巣を作っているか調べてみました。その結果、私たちの家にもツバメやスズメ、ムクドリ、キジバト等が巣を作っていることがわかりました。そして、皆さん、大事に見守ってやっていることもわかりました。また、家庭で巣箱を架けている家もありますが、もっともっと巣箱を架けてやることが私たちの勤めであると考えています。

エ．野鳥を知っている人が多くなりました。

児童会掲示板へ野鳥の絵等をはり、名前当てをしたり、学校の周りで野鳥の声を録音して校内放送をしたりしたので、野鳥に関心が高まり、みんな自分から進んで調べるようになりました。さらに、野鳥についての生態についても関心を持つようにしたいと思っています。

オ．学年の鳥が決まりました

知っている野鳥について調べた中から、次のように学年の鳥を決め、それぞれのシンボルとしました。

1年・スズメ　2年・ツバメ　3年・キツツキ　4年・シジュウカラ　5年・ウグイス　6年・オオルリ

カ．家庭に野鳥をかわいがるように呼びかけています

家庭でも餌台を作って餌をやったり、家庭に作られた野鳥の巣を大事にしたりしています。これからも続けていくように呼びかけています。

(3)学校の周りを花や緑で美しくする

私たちの学校は、花と緑の美しい学校として、毎年表彰を受けています。花の咲くものが54種類あり、全児童が緑の少年団に入って活動しています。

学校の周りには、野鳥の好きな実のなる木がたくさんあります。3年前から、学校へも野鳥をたくさん呼ぼうという運動を始め、ウメモドキやムラサキシキブ等を植えてきました。

6月23日には、学校の石の上にあった野鳥のふんを調べてみました。バラツグミの種子が86個もあり、野鳥は確かに木の実を食べていることがわかりました。

**これからの活動**

(1)当番活動をきちんとやり、全児童で野鳥や小鳥をかわいがる。

(2)巣箱の取り付けと清掃を続けてやる。

(3)野鳥の声を放送し、鳥の名前を知らせる。

(4)愛鳥週間に関するポスターや巣箱・作文コンクールに進んで参加する。

(5)学校にある餌台に毎日餌をやる。

(6)実のなる木を植えたり、手入れをする。

(7)愛鳥に関するお知らせのプリントを作り家庭に配り、野鳥をかわいがる運動を広げていく。

# 林野庁長官賞
# 「鳥声響く御在所の森」
愛媛県肱川町立肱川中学校

**鳥類保護運動の背景**

(1)地域的環境

私たちの住んでいる肱川町は、愛媛県西南地域の内陸部にあります。周囲は四国山脈の支脈に囲まれていて、平地の少ない谷あいの町です。また、町を二分するように肱川が北流しています。町全体では6335ヘクタールありますが、このうち山林が4678ヘクタールで、全体の73.8パーセントもあり、山々に囲まれた、農林業を中心とする町です。

(2)動機と展開

肱川町において、昭和53年、町と森林組合との共同事業として、「御在所山森林組合総合開発計画」が立案され、「自然の森」を設置しようということになりました。この計画を実行に移すにあたり、中学生として、何か豊かな郷土づくりに協力することはないだろうかと考えた結果、小鳥の声の聞こえる森にしようということになり、巣箱を取り付けることになりました。材料費等は、森林組合の援助もあって、53年以降、毎年、巣箱の製作・設置に取り組み、今年で7回目になります。昨年度確認できた巣箱の数は248個もあり、自然の森に、小鳥のさえずる声も多くなってきたように思います。

**「巣箱かけ」による鳥類保護活動について**

(1)目的

①愛鳥・森林の精神を養い、豊かな郷土づくりに寄与する

私たちの町は、幸いにも大自然の中にあります。しかし、最近ではこの自然も徐々に失われつつあります。開発事業・道路のために、自然が犠牲になっているのです。開発と自然保護とが矛盾するものであってはいけません。自然との調和をよく考えた開発が必要だと思います。自分たちの住む郷土は自分たち自身でつくりあげるものだと思います。だから、私たち自身も、郷土づくりに積極的に参加すべきであると考えました。

それでは、豊かな郷土づくりに参加する上で、私たち中学生にできることは何でしょうか。こうしたことを考えて、「巣箱かけ」をしようということになりました。つまり、「巣箱かけ」を通して、鳥を愛し、自然を私たちの手で守ろうとしたのです。そして、鳥の声の聞こえる郷土を築きあげようとしているのです。

②共同作業を通して連帯意識を高める

私たちの中学校では、5つの小学校から集まってきた者が学んでいます。そこで、同じ学校で学んだ者同士、卒業記念事業として何かをしようということになりました。つまり、ひとつの共同作業をやり遂げることによって、連帯意識を高めようということです。また、毎年、先輩の事業を受け継ぐことにより、肱川中学校の卒業生としての連帯意識も高まり、ひいては地域の人々との連帯感も深まるだろうと考えました。

(2)実施内容

3年生の卒業記念事業として、毎年巣箱を製作し、3月に町営自然の森（御在所山、676メートル）に設置して、野鳥の保護にあたっています。主な作業は次の通りです。

①巣箱の製作

3年生男子全員が、技術科の時間を利用して、1人1個以上の製作にあたっています。所要時間は4時間程度です。この巣箱を過去3年間で、昭和55年度38個、同56年度48個、同57年度40個製作しました。

②巣箱の設置

昭和53年当初は、「自然の森」の遊歩道周辺に取り付けましたが、年々継続していくためには計画的な設置が必要であると考えられました。そこで、森全体を10林区に区分し、毎年、2・3の林区に重点的に設置するようにしました。今では、森全体に257個の巣箱が設置されています。次に、具体的な事例として、昨年度の例をあげてみます。

a．実施日　3月15日

b．参加人数　生徒3年生71名、先生6名

c．準備物　はしご、ロープ、針金、ペンチ、釘抜き、釘、マジック、鉛筆、記録用紙、手袋、

タオル、巣箱

d．作業内容　10班に分かれて以下の作業をします

(1)巣箱に番号をつけて巣箱を設置する。

(2)既存の巣箱の調査をして、野帳に記録する。

(3)既存の巣箱に使用されている針金が木の幹に食い込んでいるのをゆるめる。

(4)古い巣箱の清掃、修理、及び取り替えをする。

③既設巣箱の営巣状況の調査、記録と分析

各林区に設置されている巣箱の営巣状況を野帳に記録し、今後の巣箱設置の参考とする。昨年度の場合、営巣率の高い林区は３区と４区で、両林区とも落葉樹の多い林区です。これとは逆に、営巣率の低い林区は２・５・６・９林区で、常緑広葉樹の多い林区です。このことから、巣箱を設置する場所としては日当たりのよい林区、特に巣箱の入り口が明るくなるところが適切ではないかと考えられます。

**効果**

小鳥の営巣状況は年々よくなり、昨年は44個の巣箱に営巣の跡が認められました。営巣率そのものに大きな変化はありませんが、これは巣箱の総数が増加しているためで、営巣の跡が認められる巣箱の数は増加してきました。一方、「自然の森」の野鳥の種類については、観察が十分でないために断定はできませんが、地域の人々の言うところによると、メジロ、シジュウカラなど種類の増加も認められているとのことです。

巣箱かけ運動を続ける中で、私たち自身の小鳥に対する考え方も改まっていき、嘉城（かじろ）地区では、子供会が中心になって自分たちの家の付近にも巣箱をかけようということになり、夏休みを利用して18個の巣箱がかけられました。

また、運動の当初は、私たち中学生だけで行っていましたが、昭和56年度からは、大谷小学校の児童も参加するようになり、横だけでなく縦のつながりもでき始めたようです。

このようにして、中学生が中心となっていた巣箱かけも、小中学校の合同作業、森林組合の協力、先輩から後輩への事業を受け継ぐなど、徐々にではありますが、運動の広がりが認められ、肱川町は私たちの町であるという自覚も高まってきたと思います。

**今後の課題**

小鳥の営巣状況は好転していますが、営巣率そのものに大きな変化は認められません。これは、巣箱設置時の高さ、向き、傾き、大きさなどに問題があると思われます。したがって、この問題に関してはさらに検討を要すると思います。また、営巣状況調査に際しては、もっと時間をかけて、正確な調査が必要です。

最後に、私たち自身の取り組み方にも、まだまだ問題があると思います。つまり、今までの取り組みは、先生方の指導によるところが大きく、私たち自身の自主的な取り組みに欠けるところがあるということです。私たち自身の手で自主的に推進してこそ、真の運動の展開になると思います。

しかし、このような運動は、私たちの力だけでできるものではありません。さらに努力が必要です。やがては、町民全体で取り組み、町民だれもが小鳥を愛し、小鳥の声を聞きながら生活するという素晴らしい郷土をつくりたいと思います。その日が１日も早く来るよう、これからもこの運動を続けていきたいと思います。

# 日本鳥類保護連盟会長賞
# 「愛鳥の心を広げる」

愛知県豊橋市立青陵中学校

**野鳥の訪れる校内**

私たちの学校は、豊橋市の東北部豊川に近い所に位置し、現在、生徒数1775名のマンモス校となっています。校区は南の市街地から東部の新興住宅地、北西から北部にかけての水田地帯。東端の山地帯と変化に富んでいます。学校は旧制中学の校舎、敷地を利用し、築山や池があり、周りには大きな樹木が茂る良い環境の中にあります。

愛鳥モデル校の指定を受けたのは昭和41年、そして昭和56年度より、愛鳥モデル校の名にはじないよう、できる限りの活動をしようと、まず、野鳥に関心を持っている生徒を集め、野鳥クラブ、野鳥部を発足させ、愛鳥活動を進めてきました。野鳥クラブは、正規の特別活動の時間帯に組み込まれたもので、幸い80名をこえる希望者がありましたが、教室や指導してくださる先生の数などの関係で、48名にしぼりました。また、野鳥部は、授業時間外で活動する運動部と同じもので、希望者を募り入部してもらいました。本年度の部員は23名です。次に、野鳥クラブ、野鳥部を中心とした2年9ヵ月あまりの愛鳥活動のあらましを述べます。

**愛鳥活動のねらい**

昭和56年、57年、58年とも、愛鳥活動のねらいは「愛鳥の心を広げる」ことでした。私たちの学校でまずしなくてはならないことは仲間を増やすことです。そこで、愛鳥活動の実践努力目標を、①野鳥に親しむ　②野鳥を学び、知る　③野鳥を調べ、野鳥を守る　④愛鳥の心を広く知らせる　としました。具体的な活動内容は次の通りです。

**野鳥に親しむ活動**

この第1歩は、まず、野外に出て、野鳥を見ることです。それにそうように探鳥会を行っています。クラブ、部ともに共通の月別テーマをかかげ、クラブ活動の中心は、月別観察テーマに合わせた月例探鳥会です。クラブの時間は、木曜日の第5時、午後の50分間ですので、そんなに遠くまでは出かけられません。まず、身近な所からということで、校内探鳥会から始め、校区の恵まれた自然環境の中へもできるだけ出かけました。5、10、12月には学校の南を流れる朝倉川へ出かけました。6月と3月に出かけた連木城跡の大口公園には毎年アオバズクがやってきます。その他、豊川沖野、下条水田地帯、緑が丘山地帯、1キロ公園などに行きました。

一方、野鳥部は、毎週のように土曜探鳥会を行っています。四季を通して同じところに春、夏、秋、冬の年4回出かけることをめざし、季節の変化、自然の変化を総合的に見つめるようと努力しています。土曜日の午後、現地へ2時に集合、約3～4時間の行動を原則としており、主な探鳥地は、クラブの月例探鳥地の他、向山台地、赤岩寺、豊橋公園、石巻山などです。また、自由参加の四季の探鳥会も行っています。

**野鳥を学び、知る活動**

これは、「野鳥に親しむ」第一実践努力目標の延長線上にあるものです。

クラブでは月平均4回の活動があり、1回は「月例探鳥会」。2回は「野鳥講座」として、野鳥保護読本、バードウォッチング入門、野鳥図鑑、ＯＨＰ、スライド、ＶＴＲなどを使った野鳥入門から始めました。講座の主な内容は野鳥の見分け方です。あとの1回は、愛鳥ポスターや野鳥観察学習カードの作成、野鳥カード、図鑑、絵本を中心とした自主学習の時間にあてました。

野鳥部は、土曜探鳥会の他、月・水・金曜日の授業後の1～2時間を活動時間とし、主に自主的な学習に取り組んでいます。基本的なテキストは図鑑「日本の野鳥」で、野鳥カードによる学習をしています。金曜日にはＶＴＲによる学習も取り入れました。

**野鳥を調べ、守る活動**

手はじめは、昭和56年度からの朝倉川の野鳥生息調査で、年間の月別調査の結果43種の生息を確認し、昨年秋、県の「自然に学ぶ実績発表展」に報告しました。また、57年度夏からは、野鳥部は

月１回日曜日の早朝に登校して、校内の野鳥生息調査をしました。また昨年秋からは、部員による土曜探鳥会を、校区を中心とした「自然環境別鳥相調査」の方向へ持っていく努力をしています。

今年度は、全校生徒に野鳥への関心を持ってもらうため、アンケート形式による野鳥生息調査を１～２ヵ月に１回をめどに始めました。すでにアオバズク、ツバメ、ケリ、モズなどの調査を終え、かなりの成果があがっています。

今は、カワセミのすむ朝倉川の自然を守るために、水生昆虫や魚の種と数の調査、水質汚だくの調査など、朝倉川総合自然調査も手がけています。

また、野鳥部は、56年度の夏休みに巣箱を作りました。58年度は試みに校内へ、キビタキ用、セキレイ用、ムクドリ用の巣箱、ツバメ用巣台、ヒヨドリなどのための巣台や巣ポケットなどを設置しました。56年度10月には、正面築山に３基、西洋庭園に２基餌台を設置し、11～３月、毎週月曜日に給餌活動を続けてきています。「冬、野鳥を庭に」のパンフレットの呼びかけにこたえて、家の庭に給餌台を設置した生徒もいます。

**愛鳥の心を広く知らせる活動**

野鳥クラブ、野鳥部は、56年と57年、文化祭に展示発表しました。内容は次のようなものです。

①愛鳥の気持を深めてもらうための各種パンフレットの配布、「冬休み野鳥を庭に」の絵葉書販売
②「双眼鏡でのぞいてみたら、身近な野鳥10種名あてクイズ」
③鳥の鳴き声あてクイズ
④野鳥クロスワードパズル
⑤正解するとブザーが鳴りライトがつく野鳥の名当てゲーム
⑥野鳥ジグソーパズル
⑦「校区の野鳥」スライド上映
⑧野鳥を呼びよせようパネル展示
⑨巣箱と鳥の写真を結ぶ巣箱コーナー
⑩探鳥のすすめと野鳥の見わけ方パネル展示
⑪カモの見わけ方立体パノラマ展示
⑫野鳥の折り紙、バードモビール、野鳥のぞきメガネ、オリジナル野鳥ぬり絵

このうち、野鳥の見わけ方パネル、野鳥のぞきメガネ、バードモビールは、市民文化会館で行われた「東三河野鳥展」にも出品参加し、市民の人たちに愛鳥の心を広く知らせることができました。

また、今年の５月から、野鳥部は全校生徒を対象に新聞「青陵の鳥だより」を発行し、今月の鳥のコーナーや青陵を訪れた野鳥たちの紹介を通して、野鳥保護、自然保護の大切さを訴えていこうと考えています。

理科室横には「野鳥コーナー」を設け、毎月１回内容を取りかえ、パネル、写真、アンケートなどによって、野鳥に親しむ楽しさをわかってもらおうと努力もしています。

**これからやろうとすることは**

野鳥部は、調査活動を広げ充実させていきます。朝倉川の水質汚だく調査、水生昆虫の観察を充実させ、より科学的な裏付けのある自然保護活動に発展させていきます。それから、全校生徒、父兄へ、地道な野鳥を保護する気持ち、自然を大切にする心をもっと持ってもらうよう、いくつかの方法で訴えていきたいと考えています。野鳥コーナーも、展示パネルだけでなく、写真なども増やして、だれもが野鳥に親しみ、学ぶことのできる場にしていきたいと思います。

**まとめにかえて**

私たちは、何回となく朝倉川へ鳥を見に出かけました。川岸を歩いていると、鳥以外のものも目に入ります。川底の土の色、石のちがい、汚水が流れ込んでにごっている所。魚やカエルが泳いでおり、川原の植物は変化に富んでいます。石の下には小さな水生昆虫もいます。この川を通して、自然のしくみがわかりかけてきました。汚れていない水があり、昆虫がおり、魚がおり、そして力ワセミのすむ朝倉川。そのつながり、自然全体の重要さ、自然の大切さなど、もっと深く学んでいこうと思っています。

# 環境庁自然保護局長賞
# 「わたしたちの愛鳥活動」

**静岡県浜松市立砂丘小学校**

砂丘小学校は、浜松市の最も南に位置し、目の前には遠州灘が広がり、すぐ近くには、日本三大砂丘のひとつである中田島砂丘があります。学校ができたのは昭和47年で、今年で創立12年め、学級数は14、児童の数は536人です。校区の環境は、33棟の団地を中心とする住宅地と、畑と、松の木を中心とする緑地から成り、比較的住みよい環境といえるでしょう。

砂丘小が愛鳥モデル校の指定を受けたのは昭和49年でした。以来、飼育委員会が中心になって、巣箱かけや観察会、実のなる木の植樹などの活動をしてきました。56年度から新しく愛鳥クラブがつくられ、現在まで活動を進めてきています。活動の内容には次のようなものがあります。

まずひとつ目の活動は野鳥の観察です。フィールドは、校区を流れる馬込川の河口です。ここには、アシ原と干潟があり、野鳥の会の人たちの調査では、今までに130種あまりが確認されています。砂丘小からは自転車で10分くらいのところにあり、愛鳥クラブ員24人が4～5人ずつ班をつくって交代で月1回定期的に観察しています。活動の目的は、クラブ員の野鳥への興味を深め、野鳥を見わける力をつけることと、全校のみんなや父兄に「こんな身近なところに、こんなにたくさんの野鳥がいるんだよ」ということを知ってもらうことです。56年9月から58年8月までの2年間に64種を確認しました。

この活動で深く心に残っていることが4つあります。アシ原をねぐらとする数万羽のツバメの大群と、秋から冬にかけてのカワウの群れ、干潟で弱っていたコサギを助け出したこと、天然記念物のコクガンを見たことです。

ふたつ目の活動は「愛鳥カルタ」の製作です。㋐から㋚まで、全部で46組のカルタを作りました。カルタの言葉は全校のみんなから募集し、絵はクラブ員が描きました。全校のみんなに、野鳥に対する興味を深めてもらうのが目的です。名づけて「愛鳥カルタ」。これからは、愛鳥のつどいやその他の集会のときなどにも使っていきたいと思います。

46枚のうちいくつかを紹介します。

㋐アカゲラは森一番の大工さん
㋑イソシギはしっぽふりふりえささがす
㋒オオハクチョウ白い体は雪のよう
㋓カラスくん黒い洋服よく似合う
㋔空中を真一文字にアマツバメ
㋕「ケンケン」と静かな朝にキジの声
㋖サンコウチョウ飛んでる姿は竹トンボ

3番目の活動は、学校のシンボルになる鳥を決めたことです。砂丘小のシンボル：バード〝すなおかの鳥〟を全校児童の投票で決めました。校区内で見られる鳥、スズメ、ヒヨドリ、モズ、メジロ、キジ、カワセミなど20種類の絵を廊下に掲示し、ひとり1票で投票してもらった結果、メジロに決まりました。メジロは、学校から1キロメートルほど南の海岸ぞいの松林にたくさんいて、秋から冬にかけては、校庭にもよくやってきます。全校のみんなに、メジロをはじめとする野鳥にいっそう親しんでもらうために、「メジロの歌」をつくりました。

4番目の活動は、「愛鳥だより」の発行です。定期観察会のようすや、愛鳥クラブ活動内容、野鳥のニュースやクイズなど、野鳥と自然に関する記事を載せて、全校児童の家庭に配布しています。これは、お父さんやお母さん、地域の大人の人たちにも、野鳥や自然に対する関心をもってもらいたいと思って始めました。毎月1回、15日に発行しており、11月で20号になりました。

5番目の活動は、テグスの回収です。新聞や野鳥の本で、最近、つり糸が体にからみついて死んだり、けがをしたりする野鳥が増えていることを知りました。たくさんのつり人がおとずれる佐鳴湖でも、同じような事故が起きているのではないかと思い、この活動を始めました。佐鳴湖は、学校から車で15分くらいのことろにあり、冬には、ミコアイサやたくさんのカモ類が渡ってくるとこ

ろとして知られています。
テグス拾いは、クラブ員が５～６人ずつ交代で、２ヵ月に１回ずつ定期的に行っています。今までに３回行い、５月の１回目には、テグス84メートル、つり針１本、おもり２個、７月の２回めには、テグス96メートル、つり針２本、おもり１個、９月の３回めには、テグス78メートル、つり針３本、おもり４個を回収しました。たとえ１羽でも野鳥の命が救えればと思うので、これからも続けていきたいと思います。

６番目の活動は、落鳥調べです。これは２年間で39件、22種、39羽に達しています。落鳥は９月から11月にかけて多く、ムシクイ類、ヒタキ類の夏鳥が全体の半分近くを占めています。学校の中で発見される場合は、ガラス窓のすぐ下で見つかることが多く、とうめいなガラスが見えずにぶつかったのだと思います。

また、学校内だけでなく、全校のみんなによびかけて、通学途中などで見つけたら持ってきてくれるようにたのんであります。このようにして届けられたものには、ヒクイナ、クイナ、ヤブサメなどがあります。死んだ鳥は、その鳥の特徴を調べるためのよい材料になるので、図鑑や写真と比べながらよく観察した後、校庭にある小鳥の森にうめてやりました。

秋の渡りの時に落鳥が多いのは、この地域が渡りのコースになっているのかもしれません。また、海岸まで２キロメートルぐらいしかないので、これから海へ出ようとする鳥が、ここで体を休めていくのかもしれません。実際に、理科室のベランダで、朝からお昼ごろまで、時々、目をとじて、じっとしているメボソムシクイを見たことがあります。

こういうかわいそうな事故を何とか防ぎたいと思い、特に事故の多い理科室の窓には、帰るときに白いカーテンをひいていくようにしました。それがよかったのかどうかわかりませんが、57年の秋には、この場所での落鳥は 1/3 ぐらいに減りました。とても興味深い問題なので、これからも記録をとり続けていきたいと思います。

その他の活動としては、冬の給餌活動、巣箱かけ、傷病鳥の保護、愛鳥看板の設置、実のなる木の植樹などがあります。

給餌活動は、冬期の餌不足を補いながら、野鳥の行動を身近に観察するために始めました。校庭に餌台と水場を作って、ヒエ、アワ、トウモロコシ、ミカン、リンゴ、カキなどを置いてやりました。休み時間や昼休みに、教室の窓から観察しました。野鳥が餌をつついたり、水あびをしたりするようすはとてもかわいらしく、やってよかったなぁ、と思いました。

来た鳥は全部で14種類、一番先に来るようになったのはスズメで、次がヒヨドリでした。毎日のように来た鳥は、スズメ、ヒヨドリ、メジロ、キジバト、ツグミの５種類でした。一番さわがしくていばっているのはヒヨドリです。反対に、ツグミは気が弱く、スズメがそばに来ただけで逃げてしまうこともありました。５種類の強さの順位は、だいたい、１番ヒヨドリ、２番キジバト、３番スズメ、４番メジロ、５番ツグミの順でした。それぞれの鳥の好きなえさがわかり、スズメの砂浴び、ヒヨドリのとびこみ式の水浴びも見られました。

野鳥の好む実のなる木は、ヒサカキ、ガマズミ、ネズミモチ、ピラカンサ、マサキ、ツルウメモドキ、クロガネモチ、イヌツゲ、ムラサキシキブなど９種類、約70本が植えてあります。

以上のほかに、毎年５月の愛鳥週間のときに行われる「愛鳥のつどい」、５月・６月の毎朝、放送委員会と協力して実施している「野鳥のさえずり放送」、ＰＴＡの文化部と協力して行った「親子でツバメの大群を見る会」などがあります。

これからは、現在の活動を進めながら、１年生から６年生まで全校児童がひとつになって取り組めるような活動と、地域の大人の人たちにも働きかけていくような活動を積極的に、しかもねばり強く進めていきたいと思います。

# 環境庁自然保護局長賞
# 「城山公園の巣箱利用と私たちの活動」

青森県三戸高等学校

**三戸高校について**

三戸高校のある三戸町は、青森県の東南部に位置し、米とリンゴ作りが盛んな農業地帯です。人口約15,000人、面積150㎢の三戸町は、南部藩の発祥の地として歴史の古い町でもあります。三戸高校は町の中心部にあり、1学年普通科4学級、商業科2学級の併設校で、全校生徒703人の中規模校です。

**フィールドの城山公園について**

私たちの主な活動場所は、学校近くにある城山公園です。城山公園は、名久井岳県立自然公園の飛地となっていて、約30ha、海抜は131ｍの小高い丘です。また、岩手県から八戸市へ流れる馬渕川と、その支流の熊原川にはさまれた形になっています。公園内の植生は、高層にはスギ、アカマツ、ケヤキ、コブシなどが多く、下層にはウツギ、キブシ、ガマズミ、ニシキギなどとなっています。さらに、鶴池と亀池のふたつの池があって、水生植物も生育しています。

このように、多様な環境を小さくまとめたような城山公園は、野鳥の良好な生息場所となっています。

**自然科学部について**

本校に自然科学部ができたのはいつのことだったのかははっきりしませんが、昭和40年から生物の野外調査活動が盛んになっています。活動内容は、各分野に広がっています。年度によって重点の配分に違いがあるものの、野鳥に関する活動は、常に主流をなしてきました。これは、ＯＢの多くが現在でも野鳥観察を通して自然保護活動をしていることからも明らかです。

現在の部員は28人で、いくつかの班に分かれて活動していますが、巣箱を通した愛鳥活動と野鳥観察は、全員でとり組んでいます。普段の活動は城山公園が中心ですが、5月から10月までは、毎月1回は宿泊して各地を調査しています。特に8月は、1週間の日程で各地を広く回っています。

私たちの活動で欠かせないものに部誌パウロニアの発行があります。1年間の活動はすべてこの部誌に記録することにしています。この発行については、町の方々の多額のご援助を受けています。

**鳥獣保護の活動について**

(1)探鳥会を通して

昭和44年9月4日を第1回として、現在まで城山公園をフィールドとして継続しています。春夏秋は毎週火曜日の早朝6時から約1時間30分、冬期は土曜日の午後2時頃から約2時間、特別な事情がない限り、全員で行うようにしています。

現在まで89種の野鳥が観察できました。せまい城山公園だけでこんなに多くの野鳥が記録できることに、私たちは今さらながら継続の強さを知りました。同時に、先輩の残してくれた業績を、なお一層補強するのが私たちの務めだと思い、次代へ引き継ぎたいと考えています。

普段の探鳥会は部員だけですが、毎年バードウィークには広く町民に参加を呼びかけて盛大に行っています。この時はＯＢも多数参加してくれて私たちの楽しい行事のひとつとなっています。

(2)巣箱の繁殖利用

巣箱を最初に作ったのは昭和41年春のことです。この時はシジュウカラ用の巣箱を100個作り、50個を学校周辺に、50個を城山公園に架けました。この頃は、製材所からもらってきた切れ端を組み合わせて作り、はしごも手作りだったそうです。

公園の巣箱は44年には100個に、46年には200個に増やし、現在は200個の巣箱を毎年維持管理しています。年によりますが、そのほかにコノハズク用など数個の巣箱を別にかけています。現在の200個の巣箱は、シジュウカラ用100個、コムクドリ用50個、ムクドリ用50個となっています。

私たちが巣箱の数を増やさないのは、生態的バランスを考えると城山公園では200個もあれば充分だろうということ、毎年の清掃点検補修の能力を考えると、多すぎると問題があるからです。

これまでの調査で次ことのを知りました。

●野鳥は古い巣材のある巣箱は利用しない例が多

く、利用しても産座の位置が高くなりカラスなどの被害にあいやすい。

- 巣箱は2年以上経過すると急速に壊れてしまい回収しないとゴミになる。
- 取り付けひもは毎年緩めないと樹木を傷つける。
- 冬期のねぐらには巣材のある巣箱は利用しない。

以上のことから巣箱は管理能力の範囲内でつけるべきだと思うのです。

城山公園ではこれまでに毎年約30%の巣箱が繁殖に利用されています。鳥の種類はシジュウカラが大部分で、ほかにコムクドリ、ムクドリ、ヒガラ、ヤマガラ、スズメ、オシドリ、コノハズクの8種になっています。特にコノハズクの利用は日本でも初めての例で、このことが契機となって、三戸町の鳥はコノハズクに指定されました。こうした珍しい例を含めて、これまで私たちの巣箱から巣立った野鳥は約2,600羽になります。

(3)巣箱のねぐら利用について

一般に巣箱の効用は営巣場所の提供がとり上げられていますが、私たちの調査では冬期のねぐら利用も重要であることがわかりました。昭和53年から毎年の冬の夜に、月1回の夜間調査を行いました。その結果、冬期は20羽近くのシジュウカラがねぐらに利用していることがはっきりしました。おもしろいことに巣材のある巣箱は利用しません。このことからも、毎年1回の清掃は必要なことなのです。

(4)ウソの調査について

毎年ではないが、城山公園にウソが大挙飛来して桜の花芽を食べてしまうことが問題になります。ウソの捕獲が試みられた年もあります。具体的数字を述べた文献が見つからなかったので、昭和54年から57年まで全員でとり組んでみました。結果は以下のようになりました。

- ウソは花芽中の花だけを食べて、鱗片をまき散らすので、実際に食べた数より多く食べたようにみられる。
- 1羽のウソは1分間に10～14個の花芽を食べて、1日に10時間、採餌行動をとる。1日では3800～8700個の花芽を食べる。
- 城山公園の群れではひと冬に約600万個の花芽を食べる。
- 公園全体には約5700万個の花芽があるので、全体の10%強である。この程度では桜の開花にそれほど影響はない。

以上の結果でしたが、毎日雪の中で散乱している花芽を数えたり、夜明け前から日没になるまでウソを追跡したり、カロリー計算を大学の研究室にお願いしたりで大変苦労しました。その後、ウソの飛来数が少なくなり、今年は食害問題が起きていません。

(5)トウヨウヒナコウモリの生態研究

コウモリが野鳥と同様に野山の害虫を食べる益獣であることは一般に知られていません。夜行性のコウモリは飛んでいる虫を食べるので、昼のツバメ以上に農林業上有益であると言われています。

三戸町の旧ゴミ焼却場にトウヨウヒナコウモリという、現在では青森県しか繁殖地が確認されていない出産コロニーができました。いずれ取り壊される予定の建物なので、今の内に基礎的な資料をそろえたいと思い、集合分散の状況や飛び出し時間などを調査しています。取り壊しの時の保護に役立つものと考えています。

(6)野生鳥獣の保護

町の人から弱っていたり、傷ついた鳥獣が持ち込まれた時には、関係機関に連絡して野生へ帰してきました。これまでに、オオコノハズク、コノハズク、ヒレンジャク、ムクドリ、カッコウ、タヌキ、ヤマネなどを自然に帰しています。

**今後の方針**

巣箱を中心とした野鳥の総合的調査はもちろんのこと、ほかの生物を含めて多角度から、城山公園ばかりでなく、三戸地方全体の自然をいつまでも見続けていきたいと考えています。また、OBや町の人々の期待にそえるような、地域に根ざした活動を堅持したいと全員で考えています。

# 日本鳥類保護連盟会長褒状
# 「生き生きした『自然学習』の中での愛鳥活動」

山形県西川町立大井沢小学校

**私たちの学校**

大井沢は、西川町の西南にあり、北は月山、南は朝日連峰の山々に囲まれた、とても自然に恵まれたところです。私たちの学校は、この大井沢のほぼ中心にあり、児童数28名、生徒数15名の、小学校と中学校がいっしょの小さな学校です。

**「自然学習」と愛鳥活動**

私たちの学校では、昭和26年から、小・中学生がいっしょに、クラブ活動で「自然学習」をしてきました。これは、自然と触れ合い、観察することによって、自然をよく知り愛する子供になることをめざした活動です。昭和34年には、愛鳥校として農林大臣賞を受賞し、昭和34年には河北文化賞を受賞しています。また、昭和47年には、たくさんの先生方が、大井沢小中学校の「自然学習」を見にいらっしゃったそうです。今年は、大井沢中学校が、「全国へき地教育研究指定校」になりました。

この長い伝統のある自然学習の中で、私たちのお父さんや先輩たちが作った、大井沢の動物のはく製、植物の標本などは、大井沢自然博物館に展示されています。今、自然学習の各班の研究内容は、校内自然学習発表会で報告し、「かもしか」という本にまとめています。

今年から、自然学習の時間として、木曜日のクラブ活動の時間だけでなく、ゆとりの時間や、朝の観察時間も加えられました。そこで、小学校では、毎週月曜日の自然学習の時間には動物について、木曜日の自然学習の時間には植物について調べることになりました。

今年は、私たちの学校が愛鳥モデル校に選ばれたので、私たちはこの月曜日の自然学習の時間を使って、今まで動物班５人だけで行ってきた愛鳥活動を、全校愛鳥活動として進めてきました。

**愛鳥活動の内容**

私たちの愛鳥活動は「野鳥に親しむ活動」「野鳥を知る活動」「野鳥を守る活動」の３つに大きく分けられます。それぞれの内容は次の通りです。

Ⅰ　野鳥に親しむ活動

(1)野鳥観察

○どこにどんな鳥がいるかを知る

○野鳥の名前、鳴き声、色、形、大きさ、えさ、巣などの特徴を知る

○たてわり班長を中心に、みんなで協力して活動する

○野鳥観察の方法を知る

以上の４つのねらいを持って、私たちは、月曜日の自然学習の時間、みっつのたてわり班ごとに、学校近くの自然観察道や寒河江川の川原で野鳥観察をしました。１人１台ずつ双眼鏡を持って野鳥を探し、色や形、鳴き声、飛び方などをメモします。学校に帰ってから、協力して図鑑で名前を調べたり、図鑑からスケッチしたりして、観察カードにまとめていきました。この観察カードは「野鳥コーナー」に掲示しました。

この結果、実際に姿を見ることができた野鳥は、ホオジロやホトトギスなど29種類で、鳴き声を聞いた野鳥は、アカションビン、クロツグミなど11種類でした。また、ウグイスは、大橋付近の竹やぶの中からたくさん声が聞こえてきたので、こういう場所に好んで巣を作ることがわかりました。セキレイ科のキセキレイやセグロセキレイも、川原で多く見られました。飛び方に特徴があるので、簡単に見分けることができるようになりました。

私たちは、この月曜日の自然学習の時間以外に、「春、秋の１日野外観察」や「ふき採り」「ぶどう採り」のとき、登校、下校のとき、また、家に帰ってからも、野鳥観察をします。９月のぶどう採りのときは、中学生が傷ついたカルガモを見つけました。私たちは傷の手当てをし、大井沢自然博物館にあずけ、時々トンボをつかまえて食べさせたりしてきました。今ではとても元気になったので喜んでいます。す

(2)楽しい集会

毎週木曜日の朝会で、１年生から６年生まで体育館に集まって、鳥の歌を歌ったり、野鳥の詩、

作文、俳句、短歌を作って発表したりしています。また、みんなで育てているチャボに名前をつけたり、野鳥の鳴き声や特徴を覚えるために、クイズやゲームを作って遊んだりしています。とても楽しい集会なので、これからも自分たちで計画を立てて続けていきたいと思います。

(3)チャボに「おはよう」「さようなら」

私たちは、たてわり班で交代でチャボを育ててきました。登校するとすぐに餌と水をやり、観察したことを日誌に記録します。下校する時も同じことをします。チャボは、最初はオス２羽、メス３羽の合計５羽でしたが、６月にヒナがかえり、今ではオス４羽、メス５羽、合計９羽になりました。

私たちは生まれた５個の卵を定温器に入れて孵化させようとしましたが失敗しました。その後に生まれた卵は、親鳥がいっしょうけんめい暖めたので、ヒナにかえりました。やっぱり親鳥に暖めてもらうのが一番良いと思いました。チャボのヒナは約４ヵ月くらいで大きくなるので、人間よりずっと速く大きくなることもわかりました。また、飼育小屋のそうじをした時、チャボが飛んだり、す速く逃げたりしたので、みんなびっくりしました。これからも、チャボを、広いグランドなどでのびのびと遊ばせてやりたいと思います。

(4)太鼓で大井沢の自然を表現する

私たちは、大井沢の冬から春にかけての自然の移りかわりを太鼓で表現しました。この中の第３部「春を呼ぶ声」の場面には、野鳥の鳴き声を簡単なリズムにして取り入れました。

II　野鳥を知る活動

(1)テープやスライドによる学習会

私たちは、野鳥の鳴き声や特徴を知るために、テープやスライドを使いました。特に、山形県の鳥獣保護課から貸していただいたスライド「心に野鳥の声を」では、いろいろな野鳥が苦しんでいる場面がたくさんあり、とてもかわいそうでした。私たちはこの野鳥たちを守らなければいけないと強く思いました。

(2)大井沢自然博物館を利用して

私たちが外で理科の勉強をしている時、電線に止まって「チッチッチルルルチロロ」と鳴いている野鳥がいました。双眼鏡で観察し、図鑑で調べたら、ホオジロのようでした。大井沢自然博物館に行ってみると、私たちが見たのとそっくりの野鳥のはく製があり、カードに書いてある鳴き声も同じだったので、その鳥はホオジロとはっきりしました。このように、名前がわからない野鳥を調べたり、覚えたりする時に、すぐ学校のそばにある博物館を利用して、学習に役立てています。

(3)校内自然学習発表会

１年間、自然学習でしてきたことを発表する会が自然学習発表会です。この会は、大井沢小中学校にしかない「生物五訓」を全員で唱えることから始まります。そして、各班がただ発表するだけでなく、お互いにわからない点を質問したりして勉強し合う会です。今年は、中学生から、野鳥の声をテープにとる方法などを教えてもらいました。

III　野鳥を守る活動

私たちは、大井沢にいる野鳥を守ろうという願いをこめて、ポスターや作文を書きました。でも、これだけではまだまだ足りないと思います。実際に大井沢で何をすればよいのかを、先生や地区の人と相談して活動していきたいと思います。

**これからの活動**

私たちはいろいろな活動をしてきましたが、一番楽しかったのは、チャボの飼育と野鳥観察でした。チャボのヒナが水を飲んでいる姿、小さな羽をバタバタしている姿、ホオジロが空にむかって胸をはって鳴いている姿などを見ると、本当にかわいいなと思い、このような野鳥の姿がいつまでも見られたらと思います。これからも、どんどん外に出て、いきいきした野鳥の姿をたくさん見て、野鳥をよく知り、野鳥と友達になれるよう、みんなでがんばっていきたいと思います。

# 日本鳥類保護連盟会長褒状
# 「富士北麓に広がる自然を守るために」

山梨県忍野村立忍野小学校

忍野村は、富士山麓の南東に位置しています。広大な盆地は米産地であり、また、富士の伏流水が８つの池に湧き出して、野鳥が好む緑と水の豊かなところとなっています。学校の南東には、ナラ、アカマツの密集林が続き、カラマツの林の後ろにはハリモミの樹海が広がっています。

富士北麓には244種に及ぶ野鳥がすむといわれています。しかし、こうした恵まれた自然にも時代の流れは激しく押し寄せ、米づくりは高原野菜の産地と変わって、近年、ロボット工場富士通ファナックをはじめ、ＴＤＫなど、大小二十数社が進出してきています。幸い、公害問題は起こっていませんが、年とともに、自然環境は大きく変化しつつあります。

**愛鳥モデル校の指定と愛鳥運動**

私たちはいま、変わりゆく自然環境を再点検し、生きるものが共存できる自然を保全しなければなりません。そのためには野鳥保護は非常に重要な教育的活動であると考えられます。52年度に引き続き、56年度、再度愛鳥モデル校の指定を受けたことを契機に、私たちは、クラブ活動や委員会活動、児童会などを通し、全校（19学級、児童634名）に、この輪を広げることにしました。

学校では、自然環境を守る第一歩として、ＰＴＡの協力のもと、学校環境の緑化から進めることにしました。

私たちの学校はモダンな校舎で、広い芝生が緑のベルト地帯をつくり、そこから運動場が広がっています。

校舎の向かって右側にある岩石庭園（童心の庭）は、ＰＴＡが、学校の愛鳥運動に積極的に乗り出し、57年度の事業として造設したもので、県下各地からの名石が並び、山梨の自然さながらのものとなっています。庭園には、愛鳥モデル校にふさわしく直径3.5ｍの小鳥小屋が建てられ、キジバト、ウズラ、キジなども飼う予定です。

**私たちの愛鳥活動**

愛鳥活動は、野鳥の好きな子どもが中心になって組織されている愛鳥委員会によって進められています。全校活動へと広げられるものは、児童会がみんなに呼びかけ、協力し合って活動を進めています。

具体的な活動内容としては、次のようなものが挙げられます。

(1)愛鳥週間ポスターコンクール

私たちは、毎年５月上旬、愛鳥週間をめざして、図工の時間に、全校児童634名で愛鳥週間のポスターをつくります。校内愛鳥ポスターコンクールに入選した作品は、校内展示をし、５月下旬、そのうち20点を地区の吉田林務事務所主催の愛鳥週間ポスターコンクールへ学校代表として出品します。これまで多くの入賞者を出してきました。

(2)愛鳥写真コンクール

写真クラブでは、好きな鳥や身近な小鳥をテーマにして写真を撮っています。作品は、愛鳥週間や愛鳥集会などで発表し、その後、校内に展示します。全校児童に喜ばれるユニークな校内写真展となっています。

(3)親子で巣箱作り・巣箱かけ・巣箱清掃

毎年、愛鳥週間に合わせて、親子で巣箱作りをしています。完成した巣箱は、５月中旬、校内巣箱コンクールに出品し、入選作品20点を林務事務所が主催する巣箱コンクールに出品します。これも毎年、多くの入賞者を出してきています。

また、このときまでに出品できなかった作品は、夏休み中に完成させて、２学期の初めに学校へ提出します。愛鳥委員会は、これらの巣箱を集めて、点検、保管します。巣箱かけは、毎年10月下旬～12月上旬です。

〈巣箱作りで留意したこと〉

- 作る前に必ず設計図を提出し、出入口の高さや穴の大きさ、水はけなどが適当か点検する。
- あまり標準化せず、創意工夫を大切にする。
- 次に作るとき参考にすることは何かを発見する。

〈巣箱をかけるとき留意したこと〉

●利用する野鳥はシジュウカラが多いので、2～3mくらいのところに取り付ける。

●巣箱を木に付けるときは、針金で木の幹をいためないように工夫する。

〈巣箱清掃のときに留意したこと〉

●野鳥のほかに巣箱を利用するものは何か（ネズミ、ヤマネ、その他）を調べる。

●他の人がかけた巣箱も清掃する。

(4)野鳥を調べる活動

野鳥を知り野鳥を守っていく活動を進めるためには、どんな野鳥がどんなところに生息しているかを知らせ合うことが必要です。私たちは、野鳥委員会を中心に6年生全体でこれを調べてみました。時期は夏休み中、大磯町との交歓会のときとして、調べる範囲は学校を中心に3～4km以内、主に調べる場所を5ヵ所にしぼりました。そして、大磯町の6年生にも協力していただき、次のようなことがわかりました。

●学校の北東・東側の山、スギ・ヒノキの森にいる鳥：ムクドリ、アカゲラ、キジバト、カラス、シジュウカラ、アカハラ、ヤマガラ、カケス。

●学校の南東側のナラ・アカマツの密集林にいる鳥：シジュウカラ、ヤマガラ、メジロ、ウグイス、アカハラ、キジバト、カラス、アカゲラ、ムクドリ。

●学校の裏山側、かや野（草原の山）にいる鳥：キジバト、カッコウ、モズ、ヒバリ、ホオジロ、ムクドリ、ウグイス、カラス。

●忍野入海や川辺にいる鳥：セキレイ、カワセミ。

●人家の付近にいる鳥：スズメ、ツバメ、カラス、シジュウカラ、アカハラ、ムクドリ、セキレイ。

また、次のようなこともわかりました。

●カラス、ムクドリなど群れをなしてどこにでもいる鳥と、スズメ、ツバメのように人家の付近にすむ鳥がいる。

●カッコウのように、モズ、ホオジロ、ヒバリ、ウグイスなど草原を好む鳥の近くにいるものもある。

●カッコウは、モズ、ホオジロ、ウグイス、ヒバリなど、主に草原で繁殖している鳥の巣に卵を生んで、自分ではヒナを育てない。

●ツバメ、アカハラ、カッコウのように、秋になると暖かいところへ行く鳥がいる。

●学校の南東側の密集林には野鳥が多くいる。

(5)愛鳥集会（体育館使用）

児童会本部役員、愛鳥委員会が計画立案、進行を担当して、愛鳥集会を開催しています。内容は次のようなものです。

●大きい画用紙に鳥の絵を描き、みんなの前で発表し、その鳥の名前、形、性質、すんでいるところ、餌の種類などを説明します。

●5、6年生が作った巣箱の中で、よいもの20点を発表します。また、その中で特によい巣箱3点について、どこが特によいのかを先生に説明してもらい、巣箱を作るときに大切なことを勉強します。

●愛鳥委員会が飼っているインコとジュウシマツについて、そのようすを発表し、スライドや絵、写真を使って野鳥について説明します。

●愛鳥委員会は、5、6年生が作った巣箱を学校林や学校の近くの木にかけにいきます。

**今後の活動**

野鳥愛護は、私たちの自然環境を守るためのものです。私たちは、富士北麓に広がる自然を守るために、野鳥の保護を続けていきます

●愛鳥集会を続けていきます。

●巣箱の取り付け・清掃を続けていきます。

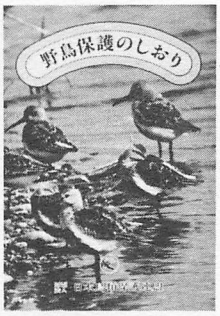
●校内放送で野鳥の声を広めていきます。

●餌台に集まる野鳥の種類や数、四季おりおり学校付近に来る野鳥の種類など、野鳥について調査・研究をします。

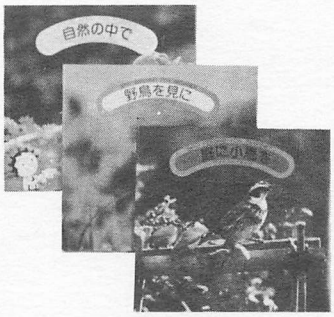
●東海自然歩道を探鳥の場にしていきたいと思います。

# フィールドショップ

●野生鳥類の保護
定価1,500円　送料250円
・餌台の作り方から法律までの幅広い自然保護読本

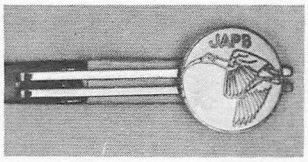



●野鳥保護のしおり
定価90円　送料70円

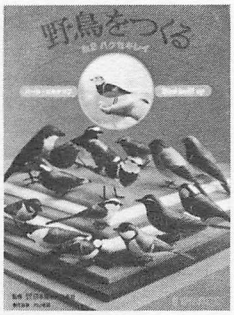



●美しい自然シリーズ
（Ⅰ）庭に小鳥を　（Ⅱ）野鳥を見に
（Ⅲ）自然の中で
定価各300円　送料170円

●トキバッチ（直径19mm）
定価800円　送料60円




●トキのネクタイピン
定価1,200円　送料120円




●バードビルタップ
（Ⅰ）ルリビタキ　（Ⅱ）ハクセキレイ
定価各2,200円　送料300円

●自然の教室
定価2,200円．送料300円
・「私たちの自然」からの抜粋集

●バードカービング入門書
バードカービング・木彫りの鳥を作ろう（朝日ソノラマ）
定価2,500円　送料300円
バードカービング・野鳥を彫る（講談社）
定価2,500円　送料300円

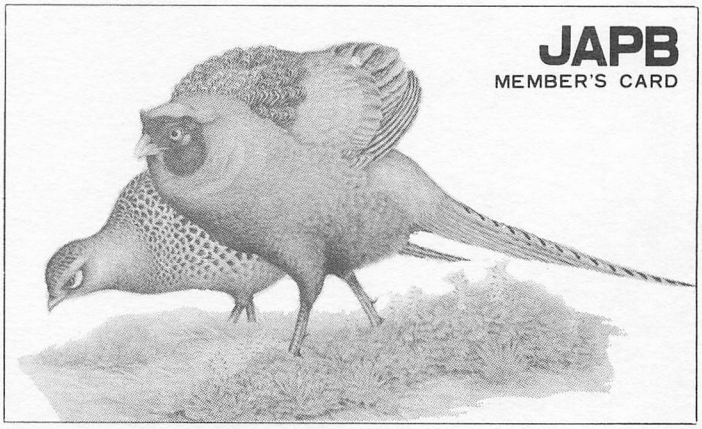
●野鳥ハンカチ・エナガの親子（３枚セット）
定価1,500円　送料70円
●たのしいぬり絵　定価380円　送料200円
藪内正幸氏によるカラーイラスト
●スライド＆カセット・私たちと野鳥
定価18,000円　送料950円
●ヤンバルクイナ絵ハガキ（３枚）定価300円　送料60円
●鳥類生態学　定価13,500円　送料サービス
●野外における危険な生物　定価2,000円　送料250円
●東京の野鳥　定価1,800円　送料250円

◎バードカービングコーナー

★バードカービングキット
キットには図面、彩色見本、足材、カットされた木材（ジェルトン材）が入っています。

| | | |
|---|---|---|
| カワセミ（両面挽き） | 定価2,200円 | 送料240円 |
| 〃　（片面挽き） | 〃1,700円 | 〃350円 |
| 〃　（飛翔形） | 〃3,200円 | 〃240円 |
| モ　ズ（両面挽き） | 〃2,300円 | 〃350円 |
| 〃　（片面挽き） | 〃1,800円 | 〃350円 |
| カワラヒワ | 〃1,500円 | 〃240円 |
| トモエガモ | 〃5,900円 | 〃600円 |
| オシドリ | 〃7,200円 | 〃600円 |

★彩色セット　定価2,900円　送料600円
内容：リキテックス絵具（12色），平筆・細筆，ペーパーパレット，ポリマーメディウム（40cc），ジェッソ（40cc）モデリングペースト（20cc）

お申し込みは――
●現金書留、郵便振替または切手などでお申し込みください。
●プレゼントご希望の方は、相手の方の住所氏名をお忘れなく明記してください。またメッセージなどをお送りいただければ、プレゼントに添えて発送いたします。
●事務所へ直接おいでになる場合は、在庫の有無を電話で確認してからおいでください。
●「野鳥の歳時記」の通信販売はありません。

(財)日本鳥類保護連盟
〒150 渋谷区宇田川町37―10　渋谷レジデンシャルオフィス405
Tel　03(465)8601　振替・東京５―19214